ア。併し周圍の空氣に依ると爭議團も今が切り上げ時ぢやろと思ひますよ。だから先生、是非一つ。」

「それ程に爭議團に好意を以て言はれるなら兎に角話だけはして見やうがぢや、多分むづかしいと思ふね。」

高須翁は爭議團に對し、此際妥協解決の道を講ずることが利益であると勸告し、要すれば仲裁の勞を取ることを厭はない旨を言ひ入れた。

爭議團では直に幹部會を開いて翁の申入に就いて協議した。外來の幹部中には、

「ナニ妥協！　今頃そんなべラ棒なことが出來るもんか。人を馬鹿にしてけつかる。」

「だから自由主義だの民主主義だのいふ奴は腰拔ばかりぢやといふんだ。」

「あのお爺いさん、ちと耄碌して居てね、でも、そんなに惡く言ふのは可哀想よ。」

「止せ、此の女えらいお爺いさんに同情しやがるな。耄碌どころか、事に依ると會社側か警察側のスパイかも知れんぜ。」

「以後爭議本部へ入れることは禁制ぢや。」

高須翁の提言は爭議團では一顧も與へぬのみか、却て翁を以てスパイとさへ疑ふ者があつた。

爭議團が高須翁の調停申出を一蹴したので最早や妥協解決の望みなしと見るや、今まで中立の態度を取つて居た官憲は、俄に彈壓政策を取るに至り、爭議團最高幹部を悉く檢束して了つた。

爭議團は夫れにも屈せず、更に幹部を選んで益々結束を固くし、行商隊などを出して持久戰を取つた。

併し資本と官憲との夾擊を受けては流石の爭議團も抗することが出來ず、爭議二十日の後、勞働者側は無慘にも總敗北に陷つたのである。

次に之も昭和二年の秋である。周桑郡梅木村の千原鑛山に於て勞働爭議が起つた時、臨檢に行つた今治警察署長が爭議團員を峻嶮な斷崖に誘き出し、逃げ路の無いのに乘じて拔劍警官隊の一群を派遣し、無抵抗の爭議團を無理無體に縛り上げたといふので、人權蹂躙問題を惹起した。

之を耳にした高須翁は痛く憤慨し、自ら主唱者となつて、松山の新聞記者、辯護士、自由主義者、竝に勞働組合等を糾合し、同年十月十四日大街道ラヂユーム溫泉の樓上に於て「人民の自由剝奪問題茶話會」なるものを開催した。

翁は座長席に就き、出席者は何れも官憲の横暴を責め、現地視察員派遣の件などを可決し、人權擁護の爲めに大氣勢を擧げた。

之が爲め官憲の横暴彈劾の聲が各地に擧つたので、縣當局も大に狼狽し、蒼惶として爭議調停官を現地に派遣し、爭議は勞働者側に有利に解決したのである。

*　*　*

現在松山市には市營實費診療所が設立せられ、無產者は多大の便益を受けて居る。

此の診療所は昭和三年高須翁を中心として其の期成同盟會が結成されたのに依つて催成されたものである、松山カフエーに於ける同盟會の發會式の時には市會議員及多數の市民參集して決議を行ひ、遂に市當局を動かして之が設置を見るに至つたのである。

高須翁は又法律知識に乏しく且つ辯護士に依賴すること能はざる無產市民の爲めに、松山に無料法律相談所を設置するの必要を認め、實施の計畫を運らしたるも時機熟せず、翁も亦松山を去りたるが爲め、實現を見るに至らなかつたのは遺憾である。

翁が無產者の福利の爲めに如何に心を用ひ、意を注ぎたるかの一斑を窺ふに足るものである。

*　*　*

又同じ年の頃、松山城山へケーブルカーの敷設を計畫する者現はれ、市當局及市會議員等に策動して向ふ七ヶ年間、毎年六千圓、合計四萬二千圓の市補助を受くることゝなり、將に市會の可決を見んとするの形勢に立ち至つた。

之に對し高須翁等は猛然として反對し、市の經費多端の際、一部小數市民の興樂機關の爲め無產者の膏血より成る多額の市費を支出補助することの不當を詰り、「松山城山フーブルカー市費補動反對同盟」なるものを組織し、翁は其の顧問に選ばれた。

此の合理的なる運動は市民の大なる共鳴を得て、或は市會に對し反對の意思表示を爲し、或は市長の無責任を責めて辭職勸告を爲す等、大に抗爭の結果遂に廢案となり、之が爲め市民は不當の負擔を免れることが出來たのである。

之が高須翁の松山に於ける社會運動の最後のものであつた。

*　*　*

見よ！

高須翁は因循姑息なる舊思想家の慢罵と嘲笑とを厭はず、また其の憎惡と猜疑とを恐れず、七十の老體尙ほ能く斷乎として所信に邁進したのである。

そして舊き友の一人一人離れ去るのも意とせず、一意專心唯松山市民就中無產者の爲めに盡したのである。

松山に紳士は多い、名士は多い。

だが、高須翁ほど獻身的に松山市民の爲めに盡して吳れた人が他にあるであらうか。

翁こそは眞に松山と松山市民とを愛したる强き正しき父であつた。

晩年の高須翁

孤影寂しく松山を去る

貧者と富者、無産者と有産者とは、經濟上に於ては勿論、政治的にも、社會的にも、利害相反するのが常である。

だから無産者の福利增進の爲めに働いた晩年の高須翁が、有産階級から嫌はれ、憎まれ、呪はれ、少くも好かれなかつたことは、免れ難きところであつた。

高須翁自身が如何に物質に恬淡寡欲であらうとも、今の資本主義社會に於て事業を爲すのに資本の力を借らずして成功することは絶對に不可能である。それは理屈の問題でなく、現前の事實である。

高須翁晩年の事業が松山の資本家と如何なる關係があつたかは知らぬが、翁が資本に窮して居たことは事實である。

翁は晩年知人に向つて斯んな話をしたことがある。

「世間の人はよく金利々々と言ふが、金利が高いとか。安いとかいふことは、金を借りて見て

始めて判ることで、貸す方で兎や角判る性質のものでない。金を借りて見るとお互に貧乏人の辛さ苦しさが好く判る。同時に金持が如何に無理なことを貧乏人に強るて居るかといふことも好く判る。云々」

事業家に取りて、事業資本の窮迫がやがて生活經濟の窮迫となることは、喉を通つた食物が胃に入らねばならぬのと同じ程度の必然さである。

何十年かの長き間、松山市民の目に馴染んだ「高須峰造」の門札が二番町の角屋敷から取去られたのは昭和二年の頃であつた。藩政時代から其のまゝの武家屋敷。あのガッチリとして錆びた表門。翁華やかなりし頃、松山の紳士にしてあの門を潜らなかつた者が果して幾人あるであらう。

家同じきも人同じからず、高須翁は經濟問題の爲めに多年住み馴れた二番町の家を人手に渡して、さゝやかな道後の新邸に引移ることゝなつたのである。

有爲轉變は人生の常、榮枯盛衰は萬物の理とは云へ、あれ程の聰明と、あれ程の人格とを有した高須翁の晩年としては、あまりにも惠まれざる運命である。

翁の盛なる時、その資産は一時五十萬位あつたとは、翁自ら語るところであつた。翁の追悼座

談會に於て此の問題につき次の樣な話が交はされた。

原惠海氏「高須先生は一時松山地方の財界でも有力者であつたようですが、先祖からの遺産といふ樣なものでも……」

富田嘉吉氏「イヤ、そんなものは無かつた筈です。」

原「それぢや一人で作つて、一人で無くしたのですな。」

富田「まアさうです。」

原「それぢや一體何でそんなに減らして了はれたんでせうか。」

富田「つまり御顏が實れて來て、年々收入と支出との釣合が取れん樣になつて來たんです。あして有名になると間口が廣くなつて來て、奥行が伴はなくなる。あの窪田節次郎さん見た樣な工合になつて……田舍の辯護士ぐらいでさう儲ける餘地はありませんから、一時中途で頭を上げたのは鑛山で儲けた時です。鑛山熱の流行した時に……。何でも五六萬圓ぐらい儲けられた事があつたが、それが一番良かつた時でせう。尤も、あの時分には早や銀行にも借金があつたりしたので、その分にも穴埋めしたでせうから、其他は大底損ばかりでした。ア

メリカ行の竹籠の製造――あれでも三萬圓ぐらいは損をして居られます。」

山本富次郎氏「個人的に頼まれたことで一萬圓ぐらい損を被むられたことも私は知つて居ります。水田さん、防水布の製造の方でも失敗した様でしたね。」

水田貞四郎氏「あれは都合よく行けば老後の生活費として月百圓ぐらいは上げられると思ふてやりかけたのでしたが……。」

山本「高須さんは頼まれたら、何でもイヤと言へん人でした。」

山本氏の言ふ如く、人に頼まれたらイヤと言へない他人に對する同情と好意とに富める人間味豐かな翁の性格が、富田氏の言つた様に、ダン〳〵細りに翁の經濟を窮迫せしめた大なる因由であつたのであらう。

物質に恬淡であつた翁は、他人から相當多くの損害をかけられたらしい。併し翁は之に就いて人にも語らず、又人を恨みもしなかつた。翁が金錢に淡白で、人間味に富んで居たことは晩年自分の小遣錢にも困つて居るにも拘はらず、失業中の無産青年に對して毎月若干の生活費を補助して居たことに依つても知ることが出來る。

高須翁は晩年いろ〳〵の事業の失敗から、親戚知人等に對して若干の迷惑を掛けたことは事實であらう。併しそれは悉く事業上の關係であつて、決して私欲の爲めの惡意に基づくものではなかつた。

しかも翁は愈々經濟的に行き詰つて拾收が出來なくなると、潔く全財産を提供して寸毫も私匿するところはなかつた。

翁は門より内は一切を夫人に委すと共に、門より外は一切を夫人に語らぬといふ主義であつた、だから何十年か連れ添はれた夫人ですら、戸外に於ける翁の行動に就いては少しも知るところがなかつたといふことである。

それだけに翁が愈々財政的に難破して明日にも家を明け渡さねばならぬといふ危局に直面した時の憂悶は實に一通りではなかつた。

「何にも知らぬ家族に今日の悲境を告げて女の小さい心を驚きと歎きとに沈ましめることは、あまりにも哀れに心許なきことである。と言つて何時までも隱しおふせる事ではなし、今日は告げよか、明日は話そか、それにしても此家を引拂ひたる後、家族の雨露を何處に凌がさう、

今更體裁を繕ふ氣はなくとも、瘠せても、枯れても、高須峰造、まさか他人の簷下にも宿れず。」と獨り思ひに惱みたる高須翁、流石に冷靜なる面にも苦悶の跡は掩はんとして隱すことが出來なかつた。

翁の經濟的破綻を薄すゝ感知して居た夫人は、最近に於ける翁の擧動や態度等により危機の漸く切迫したのを察した。

或日夫人は翁に向つて言つた。

「此節は大變御顏色も御宜しくない樣で御座いますが、何か御心配事でもおありで御座いますか、失禮な申分かは存じませんが、御家の事なら私が親戚の者に賴んで小さいものを建てゝ居りますから、差し當り其處へ入れば御心配には及びません。」

翁の顏色は俄に晴やかとなり、眼には忽ち感謝の露さへ宿つた。正に

「夫の心配なさるのを妻が知らいで何とせう」

大閤記の芝居もどきの場面である。

夫人が建てた家といふのは、翁が松山を去る前に一年ばかりの間住つた道後湯渡の家である。

夫人は翁の晩年に於ける事業の失敗と經濟の不如意とを覺り、その今日あるべきを察し、親戚の山中氏と相談の上、翁に秘して此家を建てゝ居たのであつた。

山內一豐の妻にも比すべき美談である。

それは松山から道後本街道の稍南方、田ん圃の中に建てられた二階造りの瀟洒たる家屋で、四方開濶眺望に富み、道後に近く、松山に遠からず、夏涼しく冬暖かに、七十年世路の荒波との戰に疲れた翁夫婦の老後を養ふには誠に好適の家であつた。

だが、坂の轉石は中途にして止めることは出來ない。人間の衰運も之に似たるものがある。二番町の邸を引拂ひ、老軀淋しく道後の家に移りたる高須翁は、資本主義を呪つた罰でもあるまいが、資本の神に見放されて、する事、なす事、悉く意の如くならず、時雨待つ間と立寄つた賴む木蔭にも雨漏りて、夫人の苦心も水の泡。今は又道後の家にも住み難くなつた。

正しき者必ずしも榮へず、曲れる者必ずしも衰へず、運命の神の惡戲は往々にして、正しき者衰へ、曲れる者榮へることもある。

事業の違算に基づく物質的損害以外に、嘗て人を苦めず、人を欺かず、人の爲めには勞を厭は

ず、財を吝まず、五十年の長き間、縣の爲めに、松山の爲めに、殊に晩年には惠まれざる無産者の爲めに、身を捧げて盡したる高須翁も、時利あらず、運開けず、今は狹き松山の地に六尺の身を措く處なく、孤影悄然として夫人諸共松山を去らざるを得なくなつたのである。

高須翁が愈々松山を去つて神戸なる令息の家に移ることゝなつた時、翁の知人の間には華々しく送別の宴を催ふし、以て翁の心情を慰めやうとの談もあつたが、翁は、

「御好意はありがたくお受けするが、私は事業に失敗したゝめ已むを得ず松山を引揚げるのです、だから何時又歸つて來ないとも限らない。今送別會を開いて貰つたりすると、今度歸りたくなつた時歸りにくゝなりますから、折角ですが、送別會だけは取止めて頂きたい」

と淋しさうに斷つたさうである。

そこで日頃翁と最も昵懇であつた極めて少數の人達に依つて一夜惜別の杯が明治樓で酌まれた。それは翁が愈々松山を離れる其の前晩であつた。會する人々は井上要、岩泉泰、香川熊太郎、清水勇三郎、富田嘉吉、近藤鑑、古茂田市之丞等の諸氏で、甚だ淋しき、しめやかな會であつた。

席上井上氏は高須翁の爲めに健康を祈り、次の様な感謝の辭を述べた。

「私と高須君とは親よりも兄弟よりも親しい仲で、私は高須君から斯うせないと言はれたら厭と言ふことが出來ぬほどであつた。それは親よりも兄よりも尙ほ深い敬愛の心が高須君は對してあつたからである。

唯政治上の意見に就いては遺憾ながら相違點が一つあつた。それは根本的な相違で、今日でも尙ほ意見を異にして居る。だが私と高須君との私交に就いては何の變つたこともなく、私と高須君とが何の程度に親しい間柄であり、又私が何の程度に高須君の恩義を感じて居るかと言へば、縱ひ一碗の飯を半碗に減じても高須君の一身上の事に就いては援助を致さねばならぬと思つて居る。」

高須翁が指導的立場に在つた電燈値下問題は此時尙ほ橘利八郎氏等に依つて繼續されて居た際とて、翁に對する井上氏の友情厚き言葉は痛く一座を感動せしめたのであつた。

その翌日翁は松山を後にして神戸に去つた。翁の出發を知つてか知らずか、五十年間松山の爲めに盡した人の離鄕を送くるには、高濱灣頭あまりにも淋しき光景であつた。併しそれは恐らく

翁の望むところであつたであらう。

平家の都落ちか。

赤穂浪士の立退きか。

打ち振る帽子に萬歳の聲もなく、徐ろに棧橋を離れ行く船の甲板に立てる翁の姿は寂しかつた。

二十六歳の氣鋭の青年を以て初めて松山に出て來た高須峰造は、世と戰ふこと五十年、功業遂に酬ひられず、今七十の老齢を以て松山を去らんとするのである。

幾たびか通ひ馴れたる船路とは云へ、今日は放浪の旅立である。何時歸へり來るあてもない。

人生七十、心は猛きも氣は衰ふ。老ひて故郷を去る不幸の一と歎ひた古人もある。

堀江の沖合遠く松山の城を振り返へり見たる時、あの秋の空の様に清く澄み切た、そして冬の月の様に冷たく冴へ切た翁の心にも、一抹哀愁の雲は懸らなかつたであらうか。

さすらひの異郷に逝く

殘暑猛烈の候諸君愈々御健勝に渉らせられ大慶至極に存じます。

さて私も御承知の通り最早や今年は七十の坂を越ゆる老境に入り全く役に立たぬ人間になりましたのに加へて、最近數年間の計畫した又經營に參加した總ての生産事業は、どれもこれも慘敗に終りましたので、さなきだに貧乏なものが一層窮狀に陷り、生活難に襲はれるようになりましたので、昨年來からの長男の勸めに從ひ、神戸郊外の彼れ方に寄食することに致しました。就ては平生の御交際に對し御暇乞にも參るべきでありますが、勝手ながらそれも略しまして此の愚書を以て御挨拶に代へます。玆に諸君の御健勝であることを祈ると共に、一日も早く我等の理想とする新社會の建設に努力せられますよう熱望して已みませぬ。草々頓首

八月八日

高須峰造

同志諸君

（句點は編者附）

右は古稀の新人高須峰造翁が先覺の聰明を持ちながら、時利あらず、資續かず、四面楚歌の中に孤軍奮闘、しかも遂に圍みを破るを得ず、刀折れ、矢盡き、馬斃れ、糧絶へて、五十年住み馴れた第二の故郷松山を去つて、神戸郊外令息の家に敗殘の老軀を寄せたる時、松山勞働組合員に宛てゝ寄せたる書面である。郵便の消印には昭和三年とある。

嘗ては松山辯護士界の長老として、憲政會の縣支部長として、又各種事業界の社長重役として、更に地方有志の巨頭として、名聲信望華やかなりし峰造先生高須翁の前生涯を顧る時、あまりにも烈しき環境の轉變に惻哀の情を禁じ得ざるものがある。筆執りたる翁にも何んなにか斷腸の思があつたであらう。

罪なくて配所の月に歎きたる古人の情も想ひ合せられる。

令息といふのは翁の長男一雄氏で、家は神戸市外西灘村に在り、氏は此處から大阪の社へ通勤して居たのである。

神戸に移つた後の高須翁は語り合ふべき友とてもなければ、鬱勃の雄心を纔に讀書と散策とに紛らしつゝ、仕樣ことなしの悠々自適の生活を送り、心動けば偶には松山へ歸へることもあつた。

松山警察よりの移牒でもあつたものか、神戸では初めは翁を注意人物視したらしく、時々警官の來訪や視察を受けることもあつた。或日翁が夜遲く外出から歸宅すると、門前に見覺への刑事が寒風に暴されながら待つて居た。翁の歸宅を見ると、さも安心したといふ風で行先を翁に尋ねた。人間味に富んだ翁は、如何に職務とは云へ夜遲くまで待つて居た刑事に對し同情と氣の毒さとに堪へず、刑事に言つた。

「遲くまで御待せして誠に御氣の毒の至りです。お歸へりになつたら署長に御傳へ下さい。此の高須は御見掛けの通り、既に七十を越したかよわい老人で決して御心配なさる樣な人物ではありません、斯んなに遲くまで君達を煩はすことは誠に御氣の毒に堪へないから、警察へ來て据つて居れと言はれりや据つて居てもよし、電話でも引ひて下されや、外出先きを一々御通知しても宜いのです。」

翁の物靜かな態度と、優しい言葉に安心したものか、其の後再び刑事の訪問を受けなくなつたとは翁の直話である。

神戸在住約三年、其の間に翁は兩三回松山へ歸つたが、愛媛毎日新聞社の問題で橘利八郎氏と疎隔を來たしたのは昭和四年に歸松の時であつた。

其後昭和六年、一雄氏が東京の社へ轉勤することゝなつたので、翁も共に上京して初め居を大森に構へたが、後横濱市鶴見へ移轉した。

東京での翁は一切の社會運動に足を向けず、又其の方面の人とも交らず、專ら讀書三昧に心中の憂憤を慰めて居た。そして讀書に倦めば散歩に出で、足の向ふに任せて時には品川灣の海風に鬱氣を拂ふたこともあるであらう。又時には鶴見の岡の松風に悶情を慰めたこともあるであらう。

大森に在る頃には田中幸利君といふ青年の家を好く訪ねられた。田中君といふのは其の夫人が一雄氏の夫人と無二の親友で、神戸時代からの知合であつたのが、遇然にも東京で又同じ大森に住むことゝなつたのである。

そんな關係で、田中夫人は翁のことを「お父さん〳〵」と呼び、翁も亦田中君夫妻を我子の樣に愛して居た。毎月數回、時としては一週間も連續毎日田中家を訪づれることもあつた。

「今日は、また來たぞな。」

と翁は田中家の玄關で挨拶しながら、自分の家にでも歸つたかの樣に、田中氏の在否に拘はらず、二階へ上つて、きちんと机の前へ据はり、机上の書物などを讀むのが常であつた。そして若い夫婦を相手に戯談など言つて、嬉しそうに歸つて行つたものである。

あまり話がはづんで遲くなつた晩などは、殆んと外泊をしたことのない翁も、此家ばかりでは泊つて行くことさへも屢あつた。

翁は田中夫婦に口癖の樣に、

「欲は言はん、もう十年生きて居たい。十年すれば社會狀勢が變つて指導階級が轉換するから、それを見て死にたい。あんた達は若いから良いなあ。」

と言つて居たそうである。

大森から鶴見へ移られたのは、以前松山で高須家に女中として永年勤めて居た婦人で、鶴見に小さい店を開ひて居たのが、

「且那樣も奥樣も御年を召されたので、成るたけ御近くに居て昔の御恩返へしをしたいから。」

と、自分で家まで捜して引つ越しを頼んだ爲めださうである。之を見ても雇人に對して翁が如何に良き主人であつたかゞわかる。その婦人は翁が亡くなる少し前に、翁の病氣を看護しながら、

「永年御勤めをさして頂きましたが。且那樣はいつもお優さしくて、ついぞ一度も荒い御言葉を伺つたことがありませんでした。ほんとにお偉ひ方です。」

と心から翁の溫情と慈愛とを感歎して居た。

鶴見では、松山で辯護士の同僚であつた夏井保四郎氏が川崎市で公證人を開業して居たので、屢々往來して碁を圍んだりして居た。翁は素人碁では一寸強い方で、初段に三目ぐらいであつた。

斯樣に翁は全然活社會を忘れて、一個遁世の好々爺たる觀はあつたけれども、持て生れた聰明なる頭腦と、理性に強き性格とは、社會問題に目をつぶり、耳を塞ぐことが出來ず、時々松山の知人に送る書翰には憂世の熱情と慨世の悲憤とが躍々として書中に精彩を放つて居た。

翁は又離松の後も常に心を松山に寄せ、殊に地方經濟狀態に就ひては最も深き關心を有して居たのである。今それ等書面の一二を掲出して見よう。

左は昭和七年十一月二十八日附を以て、東京から松山信用組合書記長松岡貞市氏に宛たるものである。

近頃御無沙汰致して居ります貴家皆樣御變りありませぬか、御機嫌を伺ひます。降りて私は相變らず頑健に暮して居ります。豫て御配慮中の對今銀善後策は其後如何に展開されつゝありますか、解散問題では貴下始め井上氏等も一杯食はされた形に見へますが、つまり同行重役に最初から誠意がなかつたのではありませぬか、結局破產するの外始末の付け樣はないと思はれますが御高見如何です。昨今中央の財界方面では爲替相場の下落で、外國貿易が好轉の傾向にあるので產業の或部門は聊か景氣づいてゐるやうですが、併し之も一局部の事業に限られ、一般の小賣商店などは一向に振はず、百貨店でも賣上は寧ろ減少の方だとの噂ですが、御地方の景況は如何です。農村では購入する工業品は騰貴するのに農產物は依然として低落して居るから一層生活難を加重するのでないかと考へられますが如何に觀察されますか。織物類は多少値上りの狀況ですが御地の伊豫絣、捺染あたりは如何です。御主宰の信用組合は益々好成績だらうと想察し且つ祈つて居りますが今年度の業績はどんな景氣でありますか。商工業界が活氣を呈しないと自然取引が圓滿敏捷を缺き、固定せる貸金の回收は容易ならず、有望な貸出しは出來

ず、唯預金のみが增加する樣な經營難に出食はすのが金融業の常態でありますから、當局者としていろ〳〵苦心せられる事もあらんかと拜察し御氣遣ひ申して居ります。（下略）

又次は昭和八年六月五日附を以て東京から松山公民新聞社長原惠海氏に寄せたものである。

（上略）電燈値下鬪爭に就いては日夜御奮鬪で嘸かし御心勞のことゝ拜察して居りますが同志の意氣は旺盛ですか。倦怠の氣分が生ずるやうな憂慮は無用ですか。同志諸君の熱烈にして眞劍な運動あるに拘はらず擴大强化の實績が見へないやうに思はれてなりませぬが、眞相は何の程度に進展してゐるのでせうか。指導者たるものゝ苦心は他の想像の及ばざるものであることを思ひ御見舞申上げます。敬具

其他殆んど皆之に類するもので、何れも松山に於ける經濟又は社會に關せざるものはない。

高須翁追悼座談會の席上、原惠海氏の談話こそは、翁が死に至るまでも如何に松山市民殊に無產市民の爲めに心を用ゐたかを知るに最も良き例話である。原氏は言ふ。

「高須先生が松山を引揚げられる少し前、私の宅で十四五人集つたことがある。その時高須先生も見えたが、いろ〳〵の談の中に先生は斯ういふことを言はれた。

『此節松山でも失業者がだん〳〵殖へる樣で、私の宅などへも職を求める青年が澤山來るけれども、どうも仕事が無くて氣の毒ぢや。一日まじめに働きさへすれば七十錢でも、八十錢でも、せめて生きて行けるだけの金を得られる樣にしたいものぢや。それで私も貧乏はして居るが、まだ千圓位の金なら何處かで何うかならうと思ふが、原君それで何か適當な仕事を考へて置いてくれんかな。』

私は其時「ハイ」と御請けはしたものゝ、甚だ失禮ではあつたがあまり本氣にもせず、その中すつかり忘れて了つて居た。すると其れから五年經つた昨年末（昭和八年）のこと、先生から來松の御通知があつたので、早速宿へ御訪ねすると、先生は以前の話をちやんと覺へて居られて、

『今度愛媛鐵道が政府に買收されることになつたので、私もほんの少しばかりおこぼれを頂載したのだが、何時か君に千圓ばかりで失業者に仕事を與へる適當な方法を考へて置いて下さいと賴んで置いたが、何ぞ名案があつたかな』

と聞かれたので、私は「ハッ」と思ひ出して冷汗が出た。『實はすつかり忘れて居りました』

と卒直に御斷はりを言ふと、

『そんなことぢや困りますな。重大な問題ぢやありませんか』

とひどく叱られたが、先生は晩年不遇になられた後でも、常に松山の事と社會問題とには頭を使はれて居た。」

之ほど眞面目に、眞劍に、松山市民の爲めを思つてくれた人が、他にあるであらうか。

松山市民は之に對して何を以て酬ひたであらう。

大將や中將やの傳記や銅像には先を爭つて多額の金を寄附する松山人は多い。だが高須翁の此の小傳記の爲めに金を出す人は甚だ少なかつた。

高須翁は昭和八年十二月粉味噌會社問題の爲め久方ぶりで松山へ歸つた。之ぞ翁が夢寐にも忘れなかつた松山の土を踏み、松山の水を飲み、松山の友に接した最後であつた。

翁は其時往訪の富田嘉吉氏に對し、

「自分もゝう年を取つたし、長生きしても唯子供に迷惑をかけるばかりぢやけれ、もし病氣にでもなれば天命に任すばかりで、養生までして生き延びようとは思はん。」

と、「まア死んだ方が好い」といふ樣な意味のことを、しんみりと話したので、富田氏も、高須さん程の人でも年を取つて不遇に居られると、あゝいふ氣持になられるものかと、非常に御氣の毒にも御痛はしくも思つたとのことである。

東京で田中夫婦に向つて「もう十年生きて居たい」と言つたのとは矛盾して居るけれども、一つは社會の醜惡なる現狀に對する義憤の燃えた時の氣持であり、一つは自己の現在に於けるさびしき境遇を顧みたる時の氣持であらう。

富田氏に話したことが籤をなした譯でもあるまいが、高須翁はその翌年の春、假りそめの病に臥したのが元で遂に復び起たず、波瀾曲折に富む數奇の運命を七十七歳の生涯に疊み込んで、死の瞬間までも濁れる社會と鬪ひつゝ、横濱市鶴見の寓居に永遠の眠に就いたのである。時は昭和九年五月十四日である。

かくて古稀の新人高須峰造は次の時代への大きな捨石と化した。

眞人間高須翁

正義に與みす

「これは兄哥（峯造翁を指す）に直接關係の有る話ではないのですが……」

と、幹林氏は又語り出した。幹林氏は高須翁の從弟である。

「……峯造といふ男がどんな性質の人間であるかといふことを知る上に參考にならうと思ふからお話しますが、まあ外傳といつた氣持で聽いて頂きたい。私自身も此時ほど人間峯造の情味豐かな性格をピッタリと心に感じさせられたことはなかつたので、それだけに印象が深いのです。今だにその時の峯造の感喜に輝いた顏が眼について忘れられませんよ。だが前以て斷つておきますが、これは私の若い時分の武勇傳の一つでして、餘り賞められた話ぢやないのです……」

＊　＊　＊

明治四十一年――當時大阪には五百軒ばかりの牛乳屋があつた。ところへ下郷傳平だの原彌兵衛だのといふ百萬長者で大阪實業界の錚々たる人達が寄集つてトラストを作り、大きな牛乳會社の

設立にかゝつたのだつた。當時牛乳の精製機はロンドンの何とかいふ會社で造るのが一番良かつたのださうで、會社側は金に委せて遙々英國からその精巧な機械を買寄せ、立派な工場の建築に取かゝつた。此の一大强敵の出現に今まで有つた小資本に依る五百軒の牛乳屋はすくみ上つて了ひ、此儘放つて置いた日には五百軒の牛乳屋――配達夫を入れると三千に近い人間がやがて路頭に迷はなければならない運命に立至るは必定、これは何とか對策を講じなければならないと、思案に餘つた結果、二十人の代表者が幹林氏を訪ね、

「何とか智慧を貸して頂きたいのですが」

と賴んで來たのだつた。

「ねえ髙須さん、何とかして新設會社を不許可にして貰ふ方法はないものでせうか？」

その當時幹林氏は絨氈其他敷物類の製造販賣をしてゐた。店は大阪に、工場は酒で名髙い伊丹に持ち、アメリカあたりまで相當手廣く賣出してゐた。

幹林氏は代表者達を前にして、

「御承知の通り私は一介の商人で、そんな難しいお話の調停なぞに立てゐやうな柄でもありませんし、又商賣の方も忙しいものですから、折角ですがお斷りします。それは誰か有力な俠客にでも賴んでみたらどうでせう？」

と一應は斷つた。

ところが、代表者達は拜まんばかりにして詰寄り、

「俠客に賴めるのだつたら何も貴方のお宅へ上るまでもないことですが、大阪の俠客で我々の味方をして呉れる人は一人も居ませんよ。よしあつたにしても、法外な報酬を取られることは必定です。その金の出せる我々でないことは貴方も充分御承知の筈です。そこで最後の綱として是が非でもと貴方にお縋りに上つたのです。貧乏神に取憑かれたと思つて一ッ助けて頂く譯には參いりますまいか」

と、事をわけて賴むのだつた。

幹林氏も初めのうちは引受ける氣はなかつたのだが、段々彼等の事情を聽いてゐるうちに、金持の横暴に對して一種の義憤を、自分自身に感じて來たのだつた。そして此の機會に金持階級を叩きのめしてやらうといふ一種痛快な氣持まで湧上つて來たのだつた。此の義俠心といふか、こ

の氣性は峯造翁同樣幹林氏も多分に受繼いでゐる人で、そのため隨分損もして來てゐる。

そこで幹林氏は、

「宜ろしい、一肌拔ぎませう。」

と引受けて了つた。

「その代り前以て斷つて置きますが、禮なぞ一文だつて持つて來たら承知しませんぞ」

決心した幹林氏は早速會社側へ交渉に出かけてみたが、既にロンドンから高價な新式の機械も購入したし、工場も建築にかゝつてゐるのだから、今更取止めるわけには行かないと、貧乏人の難澁などは頭から無視した劍もほろゝの挨拶だつた。併し幹林氏は屈することなく、家業はそつちのけにして頑强に抗議した。

一日、幹林氏が伊丹の工場へ出向いてゐると、家から電報が來た。開いて見ると、大阪へ戻るなといふ文句である。何の事だか分らないでゐると、更に追つかけて友人や牛乳屋の人々から、警察が貴下を逮捕すべくお宅へ出張つたから當分大阪へは歸らない方がいゝだらうと、何れも幹林氏の身を案じての電報やら手紙だつた。警察側は、幹林氏が牛乳屋を煽でゝ會社側から金を强請らうとしてゐるのだと解釋したものらしかつた。

「以ての外だ！」

幹林氏は眞つ赤になつて憤慨した。此の運動のために幹林氏は既に自分の金を千圓以上も投出してゐたのだ。

「金や慾でやつてゐる仕事ぢやないぞ！」

と、幹林氏は早速その旨を友人の辯護士竹內作平（故人、元愛媛縣選出代議士、前大藏政務次官）板野友造（現政友會代議士）中井隼太、中村儀藏の諸氏に書を送り、警察側の不法を詰つてやると、友人連も幹林氏に私心なきことを認め、同志二十八人で組織してゐる辯護士團體を中心にして、新牛乳會社設立反對を主張するに至つたのだつた。

それを切つかけにして、大阪の各新聞は毎日幹林氏の事を書立て、新會社の設立が如何に多〻の貧乏人を苦しめるものであるかといふことを、毎日初號活字や一號活字でデカ〳〵と報じたものだつた。警察側も幹林氏の心事を了解したものか、その後は干渉しなくなつた。

そこで幹林氏は大阪に取つて返し、更に猛烈に新設會社の重役連に抗議を申込んだが、相變ら

ずてんで耳を藉さうとしない。

「こんなことぢや何時まで經つても埒が明かんと思ひましてね、今思ふと亂暴の限りですが、全く若氣の至りでしてね……」

と苦笑し乍ら幹林氏は語りつづける。

大阪中を驅けめぐつて一夜の中に新刀二三十本を買集め、二十四五人の手下を連れて、新設會社が建造中の五ヶ所の工場の内の今宮工場へ乘込んで行つた。

「構ふことない、手當り次第に叩き毀せ！」

幹林氏の底力の有る聲が工場内に響きわたると、それを合圖に手下の一團はドウッと機械の傍に殺倒した。先方の從業員達は泡を喰つた態で狼狽てふためき乍ら逃げ出して了つた。機械類は片つ端から叩き毀されて行つた。機械その物は鐵だから刀で斬るわけに行くまいが。細々した附屬品類は踏み折る、ゴム管はぶつた斬る、ホースは引裂く、ガラス管は粉碎する、バケツは足で踏潰す……といつた具合で、瞬く間に工場は火事場の燒跡のやうな狀態となつて了つた。

輿論は會社側の不德義を書立てるし、工場を荒されても世間はいゝ氣味だ位でちつとも會社側に好意を寄せないので、到頭彼等は、傳家の寶刀である金錢に依る妥協方を申込んで來た。使ひに立つたのは、當時大阪で賣出してゐた雨の森といふ俠客だつた。

幹林氏らは、北川旅館といふ宿屋に、今日でいへば爭議團本部みたやうなものを置いてゐた。そこへ雨の森氏がやつて來た、

「高須さん、こゝは一ッわしの顏を立てると思つて妥協して丸く納めて呉れませんかなあ……」

と、行きなり二千圓の金包みを投出した。

幹林氏は心の中で「はゝあ、お出でなすつたな」と思つたので、

「雨の森さん、あんたと私とはお互ひに知合つてゐる間柄ですから、普通の事なら私もあんたのお顏を立てゝ上げたいのですが、今度の問題ばかりは博打場の出入りなぞと事が違つて、五百軒の者が生きるか死ぬるかの瀬戸際です。單なる感情の行違ひとか何とかいふのとは譯が違ふのです。ちやんとした理由があつてやつてゐるのですから、その理由が分明するまでは一歩だつて讓ることは出來ません」

と事をわけて斷つたが、そこは幾ら肚が据つてゐても感情で動く俠客のことだから、さういふ深い條理の通ずる筈がない。

「さうでもあらうが、此際默つてわたしの顏を立てゝ呉れませんか」

と言ふ一點張りで、是が非でも二千圓の金に物を言はさうとするのだつた。併し幹林氏は頑として應じなかつた。

「雨の森さん、今も申しました通り此の問題は金錢で片の付く問題ではないのです。お金が御入用なら此方から差上げてもいゝです……」

これには流石の雨の森氏も兜を拔いだが、

「では何れ相談し直しまして……」

と、しぶ〳〵歸つて行つた。

すると、此の時、同じ北川旅館の隣りの部屋で幹林氏らの折衝顚末を細大洩さず耳を澄して聽いてゐた者があつた。これこそ誰あらう、高須峯造翁その人であつたのである。かといつて、忍術使ひみたいに偶然こゝへ現はれ出たわけではない。峯造翁は當時鑛山に手を出してゐたので、

金策か何かのことで大阪へ來てゐたのである。北川旅館は峯造翁が上阪した時いつも宿る宿屋だつた。そして幹林氏との間にも金策のことに就いて種々話が進められてゐたのだつた。

雨の森氏が歸ると、峯造翁は飛出して來て、

「實に愉快だつた、こんな溜飲の下つた話を聞いたことがなかつた。わしは金策が出來なくたつていゝ、お前達の話を聞いただけで大阪へ出て來た甲斐は充分あつた、あゝ面白かつた」

と、あの物靜かな峰造か、恰ど子供が思ひがけぬ時に母親からぼた餅でも貰つた時のやうに、頻りと幹林氏の肩を叩いて、嬉しさうによろこぶのだつた。

語り終つた幹林氏は、

「私がこゝまで此話を引張つて來たのは、峯造といふ男は、さういふ筋道の通つた義俠的な話になると、それは深く感激して喜ぶ男だつたといふことを話すためだつたのです。これだけの事を話すのに隨分詰らない事をくど〳〵喋つて來ましたが、その後此の牛乳會社は農商務省から解散命令を受け自然消滅して了ひました。戰ひは先づ我々が勝つたわけでせうね、ハ、、、、」と結んで呵々大笑した。

家庭に於ける高須翁

高須翁は一面非常に感情に敏い人だつたが、併し秀れた理智でいつもそれを押へてゐた。全く修養の積んだ人で、翁に長年接してゐた家族の人に聞いてみても、又誰に聞いてみても、翁が怒つてゐたのを殆んど見かけたことがないさうである。此の點はとても凡人の及びもつかぬところだつた。

例を擧げれば枚擧に遑はないが、その一二を記してみよう。翁の夫人の從姉妹に當る人で、奥田又藏氏に嫁してゐる人がある。此の婦人は二十七八の時分に高須の家に同居してゐて、奥田氏に嫁したのも高須翁夫妻の媒酌に依つたものであるが、此の人の話を聞いてみると、翁は家に居る時でも、家族の者と餘り話をするやうなことはなく、大抵奥の離れ座敷で獨りで書見してゐることが多かつたさうである。翁は女中なぞに對しても非常に親切で、怒つたり荒々しい言葉遣ひをしたりすることは、決してなかつたさうである。

或る時、庭に落葉が散らかつてゐるのを見た翁は、女中を呼んで、

「ねえや、庭に木の葉が少し落ちてゐるやうぢやが、あれは掃いといた方がえゝのう」

と笑ひ乍ら言つたので、却つて女中の方が恐縮して了つたさうである。そんな場合でも決して「掃いとけ」とか「何してゐるんだ」とかいつたようなことは、決して口にしなかつたさうである。

又或る夏、臺所の軒下に吊されてあつた繩張の蓋が開いてゐたのを通りがゝりに翁が見つけた。併し決して女中を叱らなかつた。

「ねえや」と例の優しい調子で女中を顧み、「蓋を開けとくと中の物が風邪を引くぞい」

と注意してニコ〳〵立去つたさうである。

凡てがそんな風だつたから、女中も皆翁の德をしたつて、大抵な女中が拾年間位は勤めたものだつた。高須家の女中は長年變らないといふので松山でも評判だつた。

こんな話を書いてゐたら際限がないが、もう一つ富田嘉吉氏の思出話を附加へておかう。富田氏は十七八の時分から高須翁の家で世話になり、辯護士になつてからも、やはり翁の法律事務所で働いてゐたのであるが、その富田氏の話に依ると、

「先生の人物は吾々とは桁が違つてゐた。實に思ひ遣りの深い親切な人でした。それに人に接する時にも決して人の氣に障るやうなことは言はぬ人だつた。人一倍その點は目立つてゐた。今でも忘れられないことは、先生が一度も叱言を言はなかつたといふことである。私は生れつき字が下手だが、それでも先生は『(字が拙い)』と言つて叱つたことはなかつた。それが特に目立つた時には『字は上手になるまでクズさずに書いた方がえゝな』とたしなめられたものです、云々」

その位高須翁は自分の感情を殺して人に接してゐたのである。それは殆んど翁の生涯を通じて變らなかつたところだつた。その翁が、四國毎日を引渡す時には、唯一度色をなして、語氣まで激しかつたといふのであるから、餘程殘念だつたに違ひない。當時の翁の胸中を想ふと、我々まで眼頭の熱くなるのを覺ゆる位である。

* * *

高須翁の私生活は辯護士といふ見得を張る職業柄の爲めでもあつたのであらうが、相當派手な贅澤なものであつた。第一に邸宅とても、二番町の屋敷はその當時松山で有數な家屋の一つであつた。

翁は又有名な美食家であつた。翁が新進の辯護士として賣出して居た當時の話である。現在伊豫貯蓄銀行に勤めて居る野本氏久氏は前後十年近くも高須翁の世話になつた人であるが、氏がまだ二十歳前後の頃玉井正興といふ辯護士の家で書生をして居たことがある。高須翁と玉井氏とは同職の關係上よく行き來をして居た。それで野本氏は玉井氏の用事で屢々高須翁の宅へ行つたことがある。或時高須へ使に行くと、まアお上りなさいと座敷へ通ふされた。

「何もないが御飯でも」

と言つて出されたのが、茶碗蒸しであつたので、野本氏は吃驚した。今でこそ茶碗蒸しぐらいは何でもないけれども、その當時では實に非常に贅澤な御馳走であつたのである。料理屋でも滅多に出さない樣な御馳走を不斷の惣菜に食べて居るのだから、書生つぼの野本氏が驚いたのも無理はない。

又或年の正月に野本氏が高須翁の家へ年始の挨拶に上がると、

「お目でたう、好く來た、まアお上がり」

と言つて、例に依り客の差別もなく、座敷へ通ふされると、女中が膳を運んで來た。

「賤しい話だが、何とそれが穴子茶漬ですよ。驚きましたね。その時分穴子茶漬などを食へる家は滅多になかつたものです。その時の美味かつたことゝ言つたら、未だに忘れられませんよ。」

と野本氏は目を細くして語つて居た。

* * * *

高須翁には一雄、次郎といふ二人の息子さんがあつた。非常に子煩惱であつた翁は、毎年夏になると、二人の子供を梅津寺の海水浴にやるのに、汽車があるに拘はらず、いつも人力車で送り迎へをやらして居たといふことである。

こんな風に、翁の私生活は可なり贅澤なものであつたらしい。

翁夫妻が晩年寄食したのは長男の一雄氏の家であつた。東京へ引揚られてから後の翁は、特に目立つて夫人を大切にいたはられる風が見えて居た。翁の死因を爲したと思はれる風邪も、夫人の病氣看護に熱心過ぎた爲めに、患つたと言つても過言ではないのである。

それは、夫人の病氣が癒へて退院した其の日、……昭和九年三月二十八日……であつた。家族一同は打喜び、明日は赤飯でも焚いて退院祝ひでもしませうよと、久しぶりにニコやかな微笑で打寛いでゐると、何時の間にか高須翁の姿が座敷から消えてゐた。

「アラ、お父さんどうしたの?」

誰いふともなく言つた。

すると、翁の部屋に當てられてゐた奥の四疊半から、

「ゴホン、ゴホン……」

といふ苦しさうな咳の音が傳つて來た。

「お父さん、おかぜ引いたのですの?」

皆が氣遣つて行つて見ると、翁は炬燵に體を埋めて、いかにも寒さうに、

「風邪を引いたらしいのう」

と答へたが、その聲には元氣がなかつた。

夫人の退院で安心と疲れが一緒に來たのであらう、それから俄に發熱し出し、それきり寢つい

て、遂に呼べど歸らぬ黄泉の客と化したのであつた。

夫人が病院に入院すると、翁は毎日自宅から辨當を作つて、寒い日も雨の日も厭はず、毎日見舞に行つた。令息達が

「そんなにせいでも病院で食事は出來るのですから」

といつても翁は、

「いゝや、食事が變ると病人には良くない、何ちうても食べつけた物が一番えゝんぢや」

といつて、毎日缺かさず自身で足を運んだものだつた。

その當時の翁の氣持は、あれこれと昔を偲び、女房にも隨分無理をさせて來たからなあ……と思ふ念が、年と共に日增しに募つて來たのだらうと思ふ。晩年特に夫人をいたわる度合が深まつてゐたのである。

高須翁の自己批判

高須翁と元伊豫鐵道會社長井上要氏とは、辯護士として、政治家として、又事業家として、當

年松山に於ける二大巨頭であつた。

高須翁が今治近在の農家の出であつたのに對し、井上氏は大洲近在の農家の出であつた。共に郡部より入つて松山で名を成した者の双璧である。

翁と井上氏とは互に提携共同して恰かも形影相伴ふが如く、交みに表となり裏となりて一心同體事に當り、高須と言へば井上を想はしめ、井上と言へば高須を思はしむる程の間柄であつた。

とは云へ、兩者の性格には大なる相違があつた。或る宴席でのテーブル・スピーチで高須翁自ら言つたことがある。

「井上君と僕との性格の違ふところを一寸言ふて見ると、

井上君は藝者なんかに對しても、思ひ付くと直く其の場で物にして了ふが、藝者の方でも井上さんはお金持ぢやから後で世話がして貰へると思ふて言ふことを聞く。ところが井上君はそれ切りで金は出さんし、箒である。夫れに比べると僕は好きな藝者が出來ると一生懸命になつて、初めから言說いたりはようせずに、二月でも、三月でも懸つてよう〳〵目的地へ着く、そして一旦關係が出來たら、その女一人を何時まで守つて箒なんかは思ひも及ばんことで、金もドン

ドン注き込んで仕舞ふ。こゝが馬鹿正直な僕の性格の井上君と異ふところである。」

要するに高須翁は人間味に富み、井上氏は押しが強かつたのである。

兩者運命の相違は徹頭徹尾此の性格の相違に歸因する。

兩者共に松山に於ける傑物たることに甲乙はないであらう。唯異なるところは、

高須翁は聰明であつた。

井上氏は賢明である。

聰明であつたが故に世に先んじて世に容れられなかつた。

賢明であるが故に世に從ふて松山の大御所となつた。

高須翁は物質的には慥に慘敗者であつた。併し物質に敗れたが故に心眼に覺めることが出來たのである。

人は井上氏を以て成功者と譽め、高須翁を以て敗殘者と嗤ふて居る。神ならぬ誰か知らん百年の後を！

石原操氏の高須翁觀

峯造翁と福澤諭吉翁との關係に就いて、五十二銀行の頭取をしてゐる同じ三田出身の石原操氏は次の如く語つてゐた。

「高須さんといふ人は實に迂餘曲折のあつた人だつた。頭のいゝ肚の据つた偉い人だつた。高須さんも慶應出、私もその後輩である關係上、高須さんとは古くから交際してゐたし、秀れた先輩として常に尊敬してゐた。進んだ思想の所有者であつたと同時に膽力のある、そして辨說もよく、何所へ出しても第一人者だつた。事業關係では餘り交渉がなかつたが、我々の先輩としては松山三田會や同窓會の會長をして居られたので、色々とお世話して下すつたものである。

高須さんは福澤諭吉先生の薫陶を受けた人だけに終始福澤宗だつた。獨立自尊……これが福澤先生のモットーであつたが、高須さんも一生これをモットーとされてゐたやうである。强きを挫き弱きを助けるといつた風があつた。會社なぞでもあまり面白くなくなつて、普通の者な

ら辿ても引受けさうもないやうなものを好んで引受けられ、社長に擔がれてちつとも厭な風がなかつた。そのために隨分損もされたやうだが、これは高須さんの持つて生れた美しい性格だつたと思ふ。殊に情義に厚い人だつた。そんな具合で高須さんの生涯は實に波瀾に富み、天才的な人の誰もが辿る運命の道を歩まれたやうだつた。晩年は財政的に惠まれず非常にお氣の毒な寂しい境涯に在られたやうだが、これも高須さんの頭が時代より一歩進んでゐたゝめ、現代に受け容れられなかつたのだと思ふ。

福澤諭吉先生は實に偉大な先驅者で、人に先んじて西洋文明の移入に力められ、日本が現在の大をなす基を定められたのであるが、何分まだちよん髷を頂いてゐた當時のことであつたから、その時分の福澤先生は危險思想家としか思はれてゐなかつたのである。所が其後の世の中は先生の豫言通りになつて來てゐる。高須さんも形こそ大小はあれ、やはり福澤先生の遺鉢を繼いだ人で、常に時代に先行して進歩的思想の移入に努力された人だつた。高須さんも福澤先生同樣時代から一歩擢ん出てゐたが、時代の方がそれに從つて行けなかつたのである。私は先輩として高須さんにはいろ〳〵教へを仰いだが、今回想してみると感慨無量である。

我が國實業界のオーソリチーだつた故武藤山治氏が實業同志會を組織し政界の惑星として日本の政界を席捲する位の勢ひで運動を始めた。此人も慶應出の大先輩である。高須さんは武藤さんの主唱に共鳴して、武藤氏を松山に呼んだりした。その時高須さんはその道の經驗者だつたので、政治といふものは實に難しいものですよと武藤氏に話して居られた。武藤氏のあの大を以てしても我が政界は思ふやうにならなかつたのである。そこで今度は政治教育を始め時事新報に入つて文章報國を以て終始されたが、高須さんの生涯もやゝそれに似通つた所があつたと思ふ。武藤さんも高須さんも共に同じ福澤宗の同型の人物だつた。高須さんも一時は政治的にも社會的にも隨分華やかな時代があつたが、晩年は不遇だつた。併し高須さんとしては睡生夢死の鳴かず飛ばずの生涯を終られたよりは遙かに本懐とされたことだらうと思ふ。

花落ちて急なりと雖も境常に靜かなり

とかいふ句があるが、高須さんの生涯は實にそれだつた。世の中の人がどんなに騷でゐる時でも、高須さんが此の五十二銀行の階段を二階へ上つて來られる時の姿は、實に靜そのもので、いつもニコニコしてゐて、何所を風が吹いてゐるかといつた風だつたその時の姿が斯うして話

してゐる間もまだはつきりと眼先にちらついてゐる……」

香川熊太郎氏の高須翁觀

高須翁が松山米穀取引所理事長時代に翁の庇護を受けた元松山市長の香川熊太郎氏は高須翁を評して斯う語つた。

「人物の大きい點では高須先生位大きな人は滅多になかつた。結果と方法さへ言つておけばそれ以外の事は何一つ仰言らないで、何も彼も下の者に委し切りだつた。大將に擔ぐのに此の位好い人はなかつた。高須先生といひ、清水隆德氏といひ、松山人も惜しい人を鄕里から追出したものだが、こゝらはやはり松山人に通有な偏狹な惡い癖ぢやないかと思ふ。將來松山を發展させるためには、もつと各自が心の眼を見開かねばならぬのぢやないかと思ふ。

高須先生は大將に戴いて實に仕事の遣りいゝ人だつた。それでゐて下の者がしてゐる事が分らんのかといふと、あの明敏な頭腦でちやんと一から十まで何も彼も知り拔いてゐた。それで何一つ叱言を言はないのだから偉かつた。普通の人なら表面だけ委し切つたやうに見せかけて

內心後ろで綱を引いてゐるのだが、高須先生だけにはそれが絕對になかつた。

晩年ある事から意見の相違を來し、米穀取引所の理事長を讓つて貰ふことになつた時、私が率直にその話を持出すと、先生は「それが良からう」と今までの行掛りも何もサツパリと、本當に恬淡に退いて了はれた。こんな點は實にアツサリしたものだつた。

先生は何といつてもよく讀んで居られた、又研究も深かつた、頭も良く、辯も良く、筆を執つても大したもので、見識といひ、人格といひ、何からいつても愛媛縣の第一人者だつた。その高須さんが晩年極めて不遇なお淋しい境涯に居られたことを想ふと、その事に就いて我々後輩としてもいろ〳〵考へてみなければならぬのぢやないかと思ふ、云々」

安井雅一氏の高須翁觀

私と高須翁とが知り合つたのは第二維新聯盟を契機としてゞあつた。それから後は高須先生はしよつ中遊びに來られる樣になつた。私は先生の蘊蓄を聞き、又私の愚見を述べた。そして兩方で互に其の思想なり主張なりを忌憚なく批判し合つたりして居る中に、段々いつとはなしに思想

的に共鳴點が多くなつて來たのであつた。卒直に言ふと、私は初めは先生を餘り大きく見て居なかつた。高須先生は改進黨以來百練千磨の老政治家ではあるが、普通の政客の例に見る樣に、別に頭が有るわけではなく、數限りなく政治的罪惡を繰り返へして居る中に、政界の重鎭とか何とか呼ばれる樣になつた老人に過ぎないと思つて居た。

それに先生は長らく自分の地盤として居た憲政會から敬遠主義を取られたので、行くところが無いので仕方なしに無產運動に首を突つ込まれたのだと解釋して居たので、初めの中は左樣偉くも思はなかつたのである。故に偶先生が見えても、私はさうした色眼鏡があつたものだから、まともに話をしなかつた。或時など私は、「今まで或政黨で活躍して居た者が何でもないことで直ぐ他の政黨へ鞍替へをしたりする樣な、主義を賣り歩く樣な男は嫌ひだ、惡いと思へば改めるに如くはないといふことは、これは意志薄弱な性格者の言ふことで、私は孤城に閉ぢ籠つても終始一貫する人の方が、何物かを持つた人として尊敬に値すると思ふ。筒井順慶みたいな男は私の最も嫌ひな男だ」と皮肉まぢりに、暗に先生の過去の行動を語つたりしたこともあつた。

すると先生は別に怒りもされず、例の靜かな調子で、「それは意氣としては壯だが、時代が進めば人間の考もそれに連れて進んで行くのが本當で、舊時代の惡い遺傳思想はドン〳〵改めて行くべきである。君の樣なのは頑迷と言ふので、一徹なと言ふのとも違ふ、輕擧妄動はどこまでも戒むべきだが、思想は常に時代と共に進歩させなければならない。それに對して私は別に反對もしなかつたが、贊成もしなかつた。

長い交際で、先生の頭の良さ、聰明さ、高潔な人格など、よく判つて居ながら、何ういふものか先生が轉々として政治的にも、思想的にも、移動されたことに對して、私は今でも釋然たる氣持になれない。それはどうも矢張り性格の相違らしい。

私は高須先生が晩年無產運動に携はられたことに對して、いろ〳〵感情的にしつくり來ないものがあるが、併しそれは個人的な感情の行き懸りで、思想的には敬意を捧げて居る一人だが、その先生が、その時分既に無產運動を謳歌されて居た先生が、何うして一時にしろ實業同志會に首を突き込まれたか、まだ其時の先生の心理が判らない。併しあれだけ思想もあり、思慮もあつた人だから、誰かゞ言つた樣に實同に入り內部から資本主義を是正しようといふ遠謀深慮であつたかも知れないが、それにしてもあの時の態度はおかしかつた。何れにしても一時的にしろ先生が

實業同志會と結び付いて居たことは、先生の生涯の陰影であつたと思ふ。

高須先生はあれだけ頭の良い人であり、あれだけ冷靜な思考力を備へた人であり、又あれだけの勉强家であつただけに、立派な觀察力もあり、批判力もあつたが、何よりも先生の特長は非常な博學强記にあつた。その才識は古今東西に渉り、その蘊蓄には到底我々凡人の及び難いものがあつたが、併し先生は獨創性、獨創力に缺けて居た樣に思ふ、あれだけ聰明であつた先生にして尙ほ此の缺點を免れ得なかつた。

だが何と言つても高須先生は凡人ぢやなかつた。

山本義晴氏の高須翁觀

私と高須先生との交際は三十年ぐらい前から續ひて居たが、それは主として公的なことのみで、私的には餘り深い交りはなかつた。これは年配も違つて居た故でもあると思ふ。

高須先生は頭の非常に緻密な方で、常に讀書をされて居た爲めであらうが老人に似合はず新らしい思想を持たれて居て、終始我々を新らしい方面へと導いて下さつた。先生は政黨に關係して居られたが一面又非常に人情的なところがあつて、我々に對しても政黨的立場を離れて終始親切にして下さつた。私が或る政黨上の事で或る派の人々から妙なデマを飛ばされ、約半年に亘つて攻擊された時でも他の人は別段同情もして呉れなかつたのだが、先生は、それは單なるデマだから放つて置いても好いと言へば夫れまでだが、世間の奴等は所謂盲目千人だから、或る程度までは其のデマを反駁して眞相を說明したらよからうと幾度となく忠告してくれた。此の一事は今日でも尙ほ感謝の念を以て想起されることの一つだ。

先生は人との應對が非常に物柔かで、ついぞ先生の怒つて居られる樣な態度に接したことはなかつた。これは先生の德の力といふか、修養の力といふか、我々の樣な者の到底眞似の出來ないところだつた。

先生の晩年は御氣の毒の樣であつたが、思想方面の事には特に注意され。現代思想の尖端を行かれるまでに進んで居られた。一度私としみじみと話して見たいと言つて居られたが、お互に忙がしい體なので到頭その機會の得られなかつたことをつくづく遺憾に思つて居る。併し折に觸れ時に觸れては先生の片言隻語を思ひ出して、ありし日の先生を偲んで居る。

先生の晩年の思想に就いては無論是非の論は有らうが、之とても先生の弱者に對する深い同情の現はれで、單なる流行に引き摺られて行かれたものではなく、又徒らに新らしい思想に雷同された譯でもなかつたと思ふ。寧ろさういふ思想は先生には先天的に備つて居たのだが、社會の情勢上表面に現はれるのが遲かつただけのことで、常に自ら先頭に立つて新思想界をリードされて居た樣だつた。

之は常に人からも聞かされて居ることだが、高須先生は一旦人を信ずると何時までも其の人の面倒を見た。それが爲めに先生自身却て飼犬に手を咬まれる樣なことが間々あつた。迷惑のかゝつたことも一度や二度のことではなかつたらうと思ふ。それでも先生は尙ほ其の人を手放さなかつた。先生に見捨てられる樣な人はよく〳〵の者である。之は先生の美點であり、缺點であるといふ風に評する人もあるが、私はどこまでも先生の深い美はしい同情心の現はれであると思ふから、缺點として咎むべき性質のものではないと思つて居る。

大正八年に時の首相政友會總裁原敬氏は普選反對で議會を解散した。そこで總選擧の時、私達は尾崎敬義氏を押立てた。ところが妙なことから政友會も、當時の憲政會も、合同で尾崎氏を援助することゝなつたといふのは政友會は前からの行掛り上尾崎氏を押したのであるが、憲政會の方では尾崎氏が普選贊成論者だと云ふので押すことにしたのである。普選尙早論で議會を解散した政友會と普選贊成論の憲政會が一緒になつて尾崎氏を押さうといふのだから、理論としては妙な得體の知れないものが出來上つた譯である。頭の鋭敏なそして理想論者の高須先生がそれに氣付かれぬ筈がなかつた。政友會は普選反對で議會を解散したのにも拘はらず、普選贊成の尾崎氏を應援することは矛盾も甚だしいぢやないか。それを知りながら之に合流して共同で尾崎を押し立てやうとする憲政會も憲政會だ。これは立憲政治の本義に反することだといふので、先生等は押川方義氏を中立派から押立てゝ戰端を開始したのだつた。

一日高須先生は古町の高知屋旅館（尾崎派の選擧事務所）へ單身乘り込んで來られ、殆んど夜を徹して我々幹部を口說き落しにかゝつたものである。君達も政治をやる以上立憲政治の本義が何處にあるか位のことは百も承知であらう。速かに此の矛盾を淸算して尾崎を捨て我々の陣營に來れ、それが憲政の常道であるぞよとばかりに諄々として翁一流の論鋒で責め立てたものである。その時の情景は今でも覺へて居るが、實に火を吐く如き熱辯であつた。

幹部の一人で故人になつたが玉井忠治君などは先生の熱情に動かされて、遂に幹部を辭任した程であつた。併し我々は理論は別として一旦尾崎を擔いだ以上、今更ら見捨てる譯には行かないから、我々の氣持も諒として貰ひたいといふので物別れになり、戰鬪は日に夜を繼ひで續けられた譯だつた。

押川派の方は辯論一點張りで、しまいには街頭演說までやつた。松山で街頭演說をしたのは此の時が始めてであつたらう。押川派の辯士は浮川彌太郎、高野金重、五百木良三、寒川鼠骨と云つた俳人まで東京から飛び出して來ての應援ぶりだつた。押川派は正論と雄辯とで非常な好評を博し、開票の結果は總票八百何票の中五六十票の差で尾崎派の大敗となつたわけだが、此の時の高須先生の熱情には我々壯者と雖もたぢ〳〵だつた。高須先生の此の正義に對する熱情が、松山の知識階級を動かして了つたのである。

生島賢二氏の高須翁觀

松山電燈料値下問題で高須翁と共に獻身的に奔走した豫備海軍中佐の元市會議員生島賢二氏は、同問題に關聯して翁に就き次の樣な話をした。

「たしか大正十三年だつたと思ふ、木下傳次郎といふ男が、民衆新聞の岩橋信次郎君の紹介でやつて來た。此の男は新居郡角野村の出身で、目に一丁字もない男だが、併しながら熱情家で、腹もキレイな男だつた。嘗て四坂島住友製煉所の煙毒問題で住友へ捻ぢ込み、相當多額な煙毒賠償金を取つたが、自分は一文も懐にしないで全部被害村民に分けてやつたりした男で、私の家へ來たのは電燈料値下問題に就いてであつた。

伊豫鐵のやり方は民衆の幸福を他所にして獨り横暴を極めて居る。殊に電燈と來たら暗い上に料金は高い。私も海軍を退ひて歸つたときから氣は付いて居て、豫て癪に障つて居たので、ヨシ一つ伊豫鐵糺彈、電燈料値下運動の火蓋を切つて見やうと、翌晩今治で第一聲を揚げることにして二人で今治に乘り込み、劇場を借り受けて愈電燈料値下の第一聲を揚げたのだつた。木下の熱辯は土語丸出しの何一つ飾氣のないものだつたが、それが却て聽衆の血を沸かし、やんやと喝采で迎へられたものだつた。

高須先生は我々の此の電燈料値下運動の第一聲を聞かれると直ぐ共鳴され、援助して下さるこ

とになつたのである。私は軍人で委しいことは何も知らないので、高須先生が援助方を申出られた時には實に嬉しかつた。百練千磨の高須先生が付いて居て下さる以上、大船に乘つた樣な氣持で、それからはいろ〳〵指導を仰ひだのだつた。

高須先生は、井上要君はわしの友人だが、併し伊豫鐵のやり方は良くない。自分の腹ばかり肥して民衆の幸福といふ點には少しも考へを及ぼさない。伊豫鐵は此の不況な時代に株式に三割の配當をして居るが、一般民衆は電燈料が高いので五燭の電燈もよう點けずに居る始末だ。こんな不合理があつて好いものではない。社會の爲めに敢然起つて膺懲すべきだと、いろ〳〵伊豫鐵の內面を暴露して下されたりした。

さらにやる以上は何處までも事實に立脚しなければならぬといふので、私の家にボルトメーターを備へ付け調べて見ると、伊豫鐵側の言ふよりも遙かにボルトが足りない。これは盜電して居る證據なんだと、我々は事實をいろ〳〵列擧して伊豫鐵攻擊の鋒を鋭く進めたのだつた。高須先生を先頭として當時民衆新聞の社長だつた橘利八郎、同主幹の岩橋信次郎、それに木下傳次郎に私といふ顏觸で、縣廳へ取締方を申請に行つたが、一向に埒が明かなかつた。

そこで熱情家の木下君は松山を中心として郡中、大洲、灘方面までも演說に出掛けて大刀先鋭く伊豫鐵のやり方を糺彈攻擊した。一方我々はいろ〳〵手を廻はして盜電の證據を握るべく努力して居ると、圖らず伊豫鐵の電氣技師某が御馳走政略で、ボルト減送の事實を默認して居ることを突止めたので、更に此の事實を指摘公表して電燈料値下の當然なることを力說主張したのだつた。此の爲めにその電氣技師某は馘首の憂き目を見ねばならぬ樣な哀れな副產物まで持上つて來たが、之は個人としては如何にも御氣の毒だつたが、行き掛り上何うにも致方のないことだつた。

新聞は民衆新聞を利用した。當時の民衆新聞は全紙を擧げて伊豫鐵攻擊に移り、その筆鋒の鋭さは正に猛虎の竹林を行くが如きものがあつた。その爲めに民衆新聞の蒙つた損害は大きかつた。我々の電燈料値下問題が動機となつて全國的に値下運動が起つて來た。今治の某市會議員の如きは死を覺悟で市長に談判に行き、本會一致で値下運動に贊成すべきであるとなし、若し容れられなければ自殺すると懷から短刀を取り出したりしたこともあつた。それ程までに此の運動は白熱化したのだつた。

我々は我々で一軒々々戸別訪問をして我々の主張に贊成して呉れるかどうかを一々調印して廻つたりしたものだつた。そんな風にして此の運動は大正十三年、十四年、十五年と足掛け三年かゝつたが、流石の伊豫鐵も我々の運動に屈服して遂に電燈料の値下は實現したのだつた。此の運動に捧げられた高須先生の努力は實に多大なるもので、運動成功の大半は高須先生の智慧と力とに依ると言つても過言ではあるまい。先生は絶へず正義の爲めだ、ひるむことなくやつて下さいと、やゝともすると鈍り勝ちな我々を鞭韃して下さつたのだつた。

之で高須先生と私達は一旦運動から手を引ひたのだつたが、橘利八郎、岩橋信次郎の兩君は尙ほ足らずとなし、更に伊豫鐵攻撃を續行したのである。此の二度目の運動には高須先生は關係されなかつた。

其後我々は高須先生を松山市長に押さうと思つて種々奔走して見たのであるが、斯ういふ事件があつた爲めか、どうも高須は無産者の身方で、金持の提灯を持つて呉れさうにないからといふ理由で。所謂有力者達は贊成して呉れなかつた。併し市長に擔がれなかつたところに高須先生の高須先生らしい偉さがありはしまいかと思ふ。」

生島氏は又高須翁追悼會の時、翁に就いて次の樣に言つて居る。

「高須先生は非常に高遠な理想を持つた、また正義觀念の強い人でした。信念の前には地位も、名譽も、財物慾も考へない人で、後進を導いて下さるにも非常に親切で抱擁力の大きい人でした。又眞理を探求することに熱心で、私の知る限りでは眞理を求むる爲めには何物をも捨てゝ顧みないといふ風に見へました。眞理に生きようとせられたが爲めに、自然晩年が物質的に惠まれぬやうになられたのだらうと思ひます。晩年が不遇ではあつたが、高須先生は自分の理想が必ず實現して來るものと信じて居られた。

電燈料値下運動の時に、私が松山にも相當な人物があるのに何うして此の判り切つた運動に參加せぬのであらうかと申しましたら、高須先生は「河豚は食ひたし、命は惜しいでせう」と笑つて居られた。高須先生は正しいと思つたら、命を惜しまずに河豚を食ふ人でした。

先生は又餘程大衆的で、常に民衆と共に生きるといふやうな考への人でありました。晩年が不遇であつたが、それは先生は先きが見へる。社會の將來が見透ふせる爲めに一歩先き進んで不遇になられたのだと私は思ひます。けれども松山の人々の心に植へ付けられた高須先生の思想

は將來必ず大きく伸びると思ふ。必ず高須先生の偉大さが判る時代が來ると思ひます。私は其後社會の推移を除ろに見て居るのに、どうも先生の考へて居られた方に向つて進んで居る樣な氣がするのであります。」

清水勇三郎氏の高須翁觀

久萬索道時代、高須翁の下で働いてゐた專務の清水勇三郎氏（現松山市助役）と取締役の大野助直氏（現愛媛縣會議員、愛媛縣購買組合聯合會々長）らは交々語つた。

「高須先生は非常に頭の良い方だつたから實にキビ〳〵して社務の統制に當られた、と同時に、その間非常に情に厚いところがあり、役員に對しても、一般社員に對しても、一旦信じたら一切を委し切り、外から誰が何と云はうと變るところがなかつた。此の點高須先生のやうな方に接したことがない。會社はそんな風で落目になつて來たし、債權者は喧しく毎日のやうに催促するといつた具合で、その方の事でも手一杯なのに、尙且つ先生は常に社員の手當のことを氣にされ、いつも心を痛めてゐられた。神戸へ引揚げられてから後も時々歸松されたが、その都度

「僕は松山に居ないから借金取も來ないが、あなた方は此方に居られるので定めて借金の事で迷惑のかゝることゝ思ふ、昔なら腹を切らねば濟まなかつたでせうよ、何分宜敷お願ひします」

と、何時迄も索道會社の借金の事を氣に病んでゐられた。昨年（昭和八年）の冬も偶然電車の中でお目にかゝつたが、その時も第一番に索道會社の借金の話が出たやうなわけでした。

先生は大抵の事は我々に委し切りだつたが、併し決して放任主義ではなかつた。我々は事務上の事は餘り詳しく先生に報告してなかつたが、それでも偶々大阪の株主が來たりして食事でもする場合、先生は詳しい報告を受けてゐないに拘らず大抵の事は知つてゐて、專務や取締役と先方との間に交はされたいろ〳〵の騙引に對しても實に旨く調子を合して呉れてゐられた。だから實にスラ〳〵と交渉が運んだものだつた。我々は今更乍ら先生の細心な注意力に驚かされた次第でした。

我々は時々會社の事で先生のお宅へ相談に上つてゐましたが、先生のお宅にはいつでも澤山

のお客さんが見えてゐた。それが老人も居れば若い人も居る、紳士風な人も居れば學生も居る、商人風な人も居れば勞働者風な人も居るといつた具合で、凡ゆる階級の人々が出入してゐた。先生はその人達の誰に對しても決して差別的な態度を取らず、わけへだてなく應待され、紳士風な人に勞働者風な人を當り前に紹介して、言葉遣ひなども人に依つて變へるといふやうなことは絶對になかつた。あういふところは到底凡人の眞似られるところではありません。同時に先生が如何に廣範圍に亘つて敎養を持つてゐられたかといふことを實證するものでせう、云々」

近藤龜吉氏の高須翁觀

郡中銀行時代の翁は心情に厚い人として定評があつた。近藤氏は若い時分神經衰弱で頻々として銀行を休んだ。支配人といへば重役でこそないが、仕事は相當重要なので、さう〳〵缺勤ばかりもしてゐられるわけのものでない。銀行の行務が滯り勝ちなので、申譯ない〳〵と思ひ乍らも近藤氏はやはり頭が痛んではよく休んだ。その都度病狀を書いて翁の下へ缺勤屆を差出すと、高

須翁はどんな場合でも決して嫌味なことを云はず、又叱るやうなこともなく、いつも優しい例の筆蹟で、「才子は多病を常とす」とか「人間は常に餘裕を持つてゐなければならないから、休める間はユックリ休んで明日のために備へた方がいゝ」とかいつた意味の、實に情の籠つた手紙を出して慰めてゐたといふことである。

人が惡いことをした場合でも、高須翁は決して頭から惡くいふやうなことはなく、もう一歩高い所から勵ますやうな戒め方をしてゐた。近藤氏が二十四五の時分、給料も三拾圓にも足りなかつた時代に藝者と關係が出來、情熱に燃え盛つてゐた時分だけにどうしてもその藝者を身請してやらねばならぬ破目になり、あちらこちら驅けずり廻つて金の工面をして女を退かすには退かしたものゝ、扨てどうして此の女を養つて行つたものか、いろ〳〵惱んだ末、恥を忍んで高須翁のところへ相談に行つた。近藤氏は頭ごなしに呶鳴りつけられるものと豫め覺悟して行つたのだつたが、行つてみると案に相違して翁は例の物柔かな調子で、

「昔から英雄は色を好むといふし、又蛇は寸にして人を呑むともいふが、二十五や六で藝者を退かして養ふといふのは常人では出來ないことだ。併しそれがために親に迷惑を掛けるやうぢ

やいけない。どこまでも自分の腕で食はして行かにやいかんよ。」
と却つて變に勵ましてくれたやうな形で、近藤氏も全身汗びつしよりになつたといふことである。

「高須さんといふ人は、一度出來たことは善い事にしろ惡い事にしろ今更取返しのつかないことだから、それを責めるよりは次に間違ひを起させぬやう勵ましてやらうといふ親切な考へ方をされる方だつた。これは高須さんの一つの特徴だつた」
と、近藤氏は述懷してゐた。又た、
「これは私が薫陶を受けたうちの一ッだが、私は郡中銀行が五十二銀行へ合併されたので浪人になつた、是からどうしようかと思つて高須先生を訪ね、どこかの五十二銀行の支店長にでも使つて貰へまいか、それとも大阪へ出て株式店へでも入つてみたい氣もするのだが、どこか適當な所へ紹介して下さいませんかと、一身上の事で相談を持つて行つた。すると高須先生は『鷄口になるとも牛後になる勿れ』といふことがあるが、人は常に自らを尊しとして獨立の氣慨がなくてはならない、人に使はれるやうなことでは駄目だ、小さくとも一國一城の主人にな

らなくてはいかんと、懇々と覺されたものだつた。その時受けた先生の教訓は未だにハッキリと私の腦裡に刻み込まれてゐる。」
「同じ辯護士といつても、高須先生は、井上要、富田嘉吉なぞといふ錚々たる人物をその門下から出して、常に大將の器だつた。凡そ銀行位重役が判を澤山押すところはなからうが、普通の頭取や重役は大抵内容をよく調べた上で捺印するものである。ところが高須先生となると、算盤一ッ置いて見るでなし、内容一つ調べて見るでもなく、片つ端からベタ〳〵判を押したものである。高須先生はよく私に言つた『君、人間は盲判を捺す位の奴でないと大將にはなれないよ』と。そして附け足した、『僕は君達を信ずればこそ盲判を押すのだ。盲判が押せない位なら初めから頭取なぞ引受けなければいゝんだ』と。一生ベタ〳〵盲判を押してゐた高須さんは、貧乏はしても、一生一方の大將だつた。又人間は常に清濁併せ呑む風がなければ駄目だとよく言つてゐた。罪人だつて人間にはどこか取柄があるものだ、その取柄だけを取上げて使つてやれば、決して惡人ではないのだ、とも言つて居られた。こゝらの點になると、到底普通の人の眞似の出來ないところがあつた。それから先生の言つて居られた言葉で未だに忘れられな

いのは、『人間は常に難局に當らねばいけない』といふ言葉だつた。これは私の生涯に非常な教訓となつた、云々」

近藤氏の述懐の數々は、何れも故翁の面目を傳へて躍如たるものがあると思ふ。

女性の高須翁觀

高須翁は女性に就いて如何なる考察を有つて居たであらうか、

安井雅一氏の談に依ると、嘗て同氏が普通選擧問題で翁と意見を交換した時、婦人參政問題に關して翁は、

「女子は今日のところでは未だ政治的に目覺めて居ない。卽ち準備が出來て居ないから女子參政權は普選第二期の仕事として後廻はしにする」

と言つたさうである。

だから翁は、一部の頑瞑者流の如く、婦人を臺所の隅に幽閉せんとするものでなく、主義としては政治的にも男女の同權を認めるものであつて、婦選尙早論者であつたらしい。

從つて翁は婦人に對し所謂「女子と小人は養ひ難し」といふ儒教的東洋思想の持主ではなかつた。

併し翁は男女分權論者で、門の內外に於ける夫婦間の仕事の分限を確立し、門內家庭の事に就いては夫人に全權を委ねて居たといふことである。

翁の此の對女性觀に對し、女性は翁を如何に觀て居たであらうか

松山市唐人町の奧田又藏氏の夫人は高須翁の夫人の從姉妹で、暫く翁の家で起居したこともある人であるが、此の人の話を聞いてみても、家庭では一切仕事の事は勿論、社會のことなぞも決して口にしなかつたが、その代り家庭內の事に關しては一切夫人に委せ切りで、一言も口出しゝなかつたさうである。

「先生は家に居てもしよつ中奧のはなれで書見してゐて、女なぞと口を利くやうなことはありませんでしたし、お客さんが見えても女中がお茶を運んでゐたので、わたし達にはお客さんとのお話の模樣なぞ一向分りませんでした。わたしは近しい親戚でもあり、長くお宅で世話にもなつたのですが、それでゐて先生と口を利くやうなことは殆んどありませんでした。唯だの一

度だけ――それも先生方が二番町のお屋敷を引拂はれて道後の南町のお宅へ移つてからのことですから、昭和二年頃のことでしたでせう。その時分は高須さんのお宅も大分左前になつてゐた時で、よほどお寂しかつたと見えて、或る時わたしが訪ねて行くと、しみ〴〵した調子で、

『株といふものは恐ろしいもんぞな、五十圓になつたら賣らうと思つてゐたのに、一ときの間にすつかりガラ落ちになつてしまふてなあ、悪い時は何も彼も悪くなるものですぞな』と話されたことがありましたが、家庭の事以外の事で先生がわたしに話されたのは、之が後とも先ゝもの事でした、云々」

と、奥田氏夫人は語つてゐた。

これは獨り奥田氏夫人ばかりでなく、長らく翁の愛顧を受けた佐々田夫人なぞも同樣のことを話してゐた。翁は佐々田夫人の家を我家のやうにして出入りしてゐたが、それでゐて、三十何年といふ長い交際の間に一度だつて「商賣上のこと」に干渉したことはなかつたといふことである。

佐々田さんは、藝者の置屋が商賣だつた。

「わたしが時々お店のことで困つて先生にどうしたらいゝでせうと相談を持かけますと、先生は、『わしにはお前の商賣のことは皆目分らんから、お前が良いやうに取計つたらいゝだらう』と仰言るきりで、ちつとも取合つてくれませんでした。これは先生が一度人に物事を委したらどこまでも委し切る持前の御性分であつたのですが、それを承知してゐながら、女ですから、時には『あんまりだ！』と思ふこともありました。そんな時先生は何時でも斯う附け加へられたものです。『儲けなくともいゝから女の子等に無理をさせるな』と、いつもそれを仰言つてゐられました。云々」

佐々田さんの語る短い言葉の中にも亦た故翁の懐しい溫情が偲ばれるではないか。本當に何から何まで――藝者の身の上にまで心の行屆いた人だつた。世の中に偉い〳〵と噂に上る人は相當に居るが、いざその本尊さんに接して見ると、「來て見れば聞より低し富士の山」で、案外な感に打たれる人が多いやうである。ところが、高須翁となると――勿論高須翁とて人間であつてみれば缺點も相當にある、併しその缺點の多い人間の中で、高須翁位缺點の少なかつた人も珍らしいと思ふ。翁は本當に人間ができてゐた。頭のてつぺんから足の爪先まで、細心な溫情と叡智がたぎつてゐたのだ。

「高須さん」といへば、誰でもが直ぐに、あの二番町の黒塀の門の有る屋敷（現在は向井醫院となつてゐる）を聯想したものだが、佐々田夫人の話に依ると、

「あのお屋敷は昔はあの倍もあつたものですよ。それを衆議院議員の選擧の時、先生が是が非でも立たなければならなくなり、その費用に御屋敷の半分を賣つて了はれたのです」

といふことである。

高須翁華やかなりし頃の松山の政界は、高須翁を筆頭に井上要、御手洗忠孝、池内信嘉、森恒太郎（後の盲天外）等の諸氏が改進黨派で、自由黨派は藤野政高、長屋忠明、松下信光、岩崎一高諸氏の顔觸れが、これに對峙してゐた。

當時これらの人々は、何れ劣らず、よく遊んだものだつた。高須翁や井上要氏、夏井保四郎氏御手洗忠孝氏なぞは、取分けよく遊んだものださうである。

その頃高須翁によく招ばれてゐた老妓連の話を聞いてみると、

「その時分の人は高須先生に限らず皆さんよく遊ばれました。高須先生はあういふお靜かな方でしたから、とても藝者衆の評判がよく、先生のお座敷から招びがかゝると、恰ど親の家へ藪入りにでも行くやうなつもりで、それは樂しんだものでした。だん〳〵慣れてくるにつれて、終ひには、先生のお座敷だといふと、身拵へなぞも殆んど普段著の儘で出掛けたものでした。でも先生は何一つ叱言仰言るでもなく、只だ持前の奇智で藝者衆を面白くからかはれたり、冷やかしたりされるだけでした。それでゐて、お酒を召上らなかつたので、唄なぞは殆んど歌はれませんでしたが、それでもお話が面白いので、私達はキャッ〳〵言つて噪ぎ廻つたものでした。先生のお座敷へ行くと、どちらがお客だか分らない位で、私達の方が遊ばして貰つてゐるやうな具合でした。時には小唄の一つ位うたはれることもありましたが、今でも憶えてゐますのは、

山へ金槌を置いて來た……云々

といふ都々逸がお上手で、私達は先生の顔さへ見たら、山へ金槌を——とひようげたものでした……」

御手洗忠孝氏の語るところに依ると、翁の端唄は、

「割合上手だつた」

さうである。

又他の藝者衆の話に依ると、宴會などの歸りに高須翁の宅まで送つて行くと、必ず一圓宛きまつてチップを呉れたさうで、時に依ると、翁の家（二番町の屋敷のこと）の向への「梅の家」から送つて行つても、缺かさず此のチップだけは呉れてゐたさうである。さうしたことにも非常に細心な思ひ遣りがあつたと、老妓連は今だに翁の德を讃へて居る。

實業同志會時代高須翁の參謀となつて働いた故福島忠太郎氏未亡人は、

「先生は非常に御優しい方でした。松山を引揚げられた後も時々松山へ歸へられると、御通りがゝりによく御訪ね下さいまして、いろ〳〵慰めて下さいましたが、口癖の樣に、「淋しくなりましたなア」

と仰言つて居られました。

其の御言葉を聞かされるたびに、これは一面夫を失つた私を慰めて下さる御言葉でもあつたでせうが、また一面には先生の晩年の御境遇をも指されて居たのだと思はれます。あれほどの方が、と、昔の全盛時代の先生が想ひ出されて胸の詰まる思ひに泣かされるのでした。でも又考へます

れば、あゝした利欲にかゝわられなかつた人だけに、あゝした中に言ふに言はれぬ先生の床しさが偲ばれるのだとも思はれました。ほんとにお偉ひ方でした」

と心から感謝と同情とを翁に捧げて居た。

高須翁と未亡人

孔子の教に「夫婦別あり」といふことがあるが、凡そ高須翁の家庭ぐらい主人と主婦との職分の區別が明確に、嚴格に保たれた家は恐らく他に無いであらうと思はれる。

左は翁の未亡人と、青年の頃翁の家で書生をして居た越智秀一氏の談話を綜合したるものである。

翁の未亡人縫子夫人は愛媛縣周桑郡小松町の舊家近藤源六氏の女で、宇摩郡中之庄の豪家篠永槇太氏や、同郡土居村の右族山中好夫氏は夫人の伯父さんに當る人であつた。

高須翁が慶應義塾を終へて歸郷し、當年の新知識を以て初めて縣會議員となつたのは明治十六年、翁の青春二十六歳の時であつた。その天稟の俊英に加ふるに豐富の新知識を以てし、高邁の

識見と冷靜の思慮、理路整然たる雄辯と新進氣鋭の颯爽たる風姿とは、忽ち鐵中の錚々として頭角を現はし、一躍縣會のスターとなつた。

「此の男見込がある」と高須翁の人物に惚れ込んだのが、之も當時縣會に議席を有して居た篠永槇太氏であつた。そこで篠永氏は、幼少の頃生母に死別して以來我が子の如く可愛がつた姪の縫女を自分の養女として高須翁に嫁がしたのであつた。その時夫人は十七歳で、高須翁よりは九歳の年下であつた。

高須翁は夫人との結婚後、家憲を定めて、門より内の事は主婦が絶對權を有し、主人は一切干渉せざる代りに、門より外の事に關しては決して主婦の容喙を許さざることゝした。そして翁も、夫人も、生涯を通じて嚴重に之を格守したのである。

だから夫人は翁と五十年の長い夫婦生活の間、外に於て翁が政治家として如何なる行動を取つて居るのやら、辯護士として如何なる事件を扱つて居るのやら、又事業家として如何なる仕事に關係して居るのやら、唯出入の人達から間接に耳にするばかりで、直接に翁からは一言半句の話も無ければ、又夫人の方から尋ねもしなかつた。

之に引き換へ、足一歩門内に踏み入れば、此處は夫人の專制天下で、家事の一切は夫人の獨裁に任せ、疊が破れようと、屋根が漏れようと、塀が毀れやうと、翁は唯一口も言つたことはなかつた。況して日常衣食の問題などは夫人の爲すがまゝで、殆んど翁の念頭には存しなかつた。凡ての經費の如きも夫人の申出るまゝに支出して、その支途に就いては一言も尋ねる樣なことはしなかつた。

身の廻りなども翁は全く無關心で、何んな着物があるのやら、何處に仕舞つてあるのやらも知らなかつた。だから夫人が外出する時には、何は何處にあると紙へ書いて、箪笥の引出へ張つて置くのであつた。又親戚其他の家族的交際は夫人の受持であつたが、翁が他家を訪問する時には、夫人が土産の品を調へて、此品は何處へとしるしをして渡すのが常であつた。此等の點に就いては、翁は全く小供同樣の無頓着さを以て、夫人を絶對に信頼して居たのである。

そんな風であるから家庭に於ける翁は恰も御客樣の樣な有樣で、女中なども

「お内の旦那樣は御主人やら御客樣やら判りません」

と言つて居た程である。夫人自身も亦翁が逝いた後で、

「私は若い時から後家暮らし同様に、家の事は何も彼も委されて居たので、先生が亡くなつても、その點だけは間誤つきませんでした」

と言つて居た。夫人は翁の事を先生と呼んで居た。

翁は何人に對しても同情心が強かつたが、別して書生や女中などの目下の者に對しては一層思ひやりが深かつた。女中などが何か仕損じをして、きまり惡さうにモヂ〳〵して居る時などは、翁の方から却て慰めてやるぐらいであつた。夫人も亦翁の感化を受けた爲めか、雇人に對して非常に優しく親切であつたので、女中などは大概五年も十年も長續きがしたばかりでなく、暇を取つて後も何時までも親の樣に慕つて出入をして居つた。

之は越智氏の談である。

「先生は毎朝早く起きて道後の溫泉に行かれるのが例であつたが、私は書生の癖に朝寢坊で、先生が溫泉から歸つて來られた時には、いつもまだ玄關の床の中に藻繰り込んで居た。すると先生は僕の眠りを妨げない爲めであらう。成るべく音のせぬ樣に靜かに障子を開けて通つて行かれた。そしてついぞ一度も早く起きろと叱られたことはなかつた。」

自由思想家であつた翁は決して他人の意思行動を制肘干涉する樣なことはされなかつた。子供の教育に就いても殆んど自由放任主義で、勉强を强るる樣なことは決してしなかつた。令息達に對しても

「御前達が好きなことをやるが良い、親の義務として學資だけは出してやる。そして俺は御前達の厄介にもならない代り、財產も殘さないから其の積りで居れ。」

と言つて居たさうである。

だが翁としても矢張り人の子の親である。決して子に對して冷淡なのでも、不親切なのでもない。長男の一雄氏が翁の母校である慶應大學に入り、野球の選手となつた時、野球の危險性を耳にした翁は、心中あまり贊成はしなかつたが、さりとて子供の自由を妨げて正面から反對することも爲し得なかつた。

そこで翁の難色を見て取つた一雄氏は、翁に野球の安全味を見せる爲めに、何處かの仕合に翁を連れて行つた。幸運にも其の仕合が一雄氏の殊勳に依つて慶應側が勝つたので、土地の新聞は筆を揃へて大々的に一雄氏のことを書き立て、一躍して時のヒーローに祭り上げられた。流石に

冷靜の翁もすつかり氣を良くして一雄氏の野球選手たることを默認したといふことである。

翁は又何んな場合でも感情を外に現はすことは無かつた。喜怒色に現はれずといふ言葉があるが、高須翁こそは實に其の典型的の人であつた。翁は未だ曾て大きな聲で人と爭つたり、人を叱つたりしたことはなかつた。尤も翁と雖も人間である以上、時偶には來客と意見の衝突することもあつて、次の間で聞ひて居る夫人が氣を揉む樣なことがあつても、客が去つて居間に戻つた時には、早や光風霽月の常と變はらぬ冴へ〳〵した顏をして居た。如何なる場合にも常にニコ〳〵した溫顏を呈して居るので、五十年連れ添ふた夫人ですら、翁の顏色に依つて意中を讀むといふことは出來なかつたさうである。

翁は酒も飲まず、煙草も吸はず、小言も言はず、家庭に於ては全く理想的の善良なる主人であつた。未亡人は翁に就いて次の樣な思ひ出話をした。

「先生の父親といふのは穩やかな人でしたが少し氣の短かい方でした。母親といふのは賢い人ではありましたが氣の小さい人でした。父親は酒は飲みませんでしたが煙草は大へん好きでした。母親は煙草は吸ひませんでしたが酒は少しづゝ飲む方でありました。だから先生は兩親の

良いところだけを受け繼ひだものと思はれます。

先生は何事に對しても非常に諦めの良い人で、決して愚痴や繰言を申しませんでした。前には隨分人樣に御融通なども致した樣ですが、ついぞ一度も御催促をしたことがありませんでした。先生はいつも「返へす者は催促しないでも返へすだらうし、返へさない者は催促したつて返へすものぢやない」と言つて居りました。だから晩年整理をした時には、いろ〳〵な方の證文が束にする程ありましたが、皆んな燒いて了つた樣でした。そんな風ですから、いくら人に瞞まされても、瞞される方も惡いのぢやと言つて、少しも人樣を恨む樣なことは申しませんでした。

夫婦間の約束で、家の外の事に就いては私達には一切相談もせねば話もせず、口を容れることは無論許しませんでした。ですから儲けたのやら、損をしたのやら、蔭張り判りませんでしたが、後には子供の貯金までも引き出す樣になつたので、餘程手詰つて來たことが判りました。それでもまだ得體の知れぬ色々な人間が頻りに出入して、先生を煽てますので、それとなく注意しますと、相變はらず仕事の方は自分に任して置いて呉れと言つて、なか〳〵聞き入れませ

んでしたが、今に屹度盛り返へして見せると、最後まで成功を確信して居た様でありました。いよ〳〵行詰つて松山を引揚げる様になつた時に、先生は私に向つて、

「こんなことになつて、お前にはほんとに氣の毒だ。」

とたつた一言、慰めとも、謝まりともつかぬことを言つたばかりでした。私も以前から覺悟は決めて居りましたものゝ、愈々となつて見れば、之が五十年間夫婦生活の結果かと思ふと、つい女の愚痴も出まして、あの時に、あの人が、何うの、斯うのと申しますと、先生はいつも

「過ぎ去つたことを幾ら言つたところで仕方がない、その話は止さう。」

と言つて、何の未練も、屈たくもありませんでした。ほんとに諦めの良い人でありました。そんな譯でしたから晩年には親戚へは相當迷惑も掛けましたので、私なども大へん肩身が狹いのでありますが、他人様にはあまり不義理を致して居ないことが、せめてもの仕合せと思つて居ります。」

甲高い老夫人の聲は、いつしかしんみりと沈んで、眼は膝の上に落ちて居た。夫人は更に言葉を續けて、

「人間は貧乏しますと情ないもので、以前親しく御付合して居た方も急に疎ましくなりまして、殊に東京へ出ました後は全く御交際も絶へて、島流しの様な淋しい生活でしたが、萬事を諦めた先生はその方が却て氣樂の様でした。併し矢張り昔の御知合ひは懐かしいと見へまして、香川熊太郎さんが御上京になると、折々御通知を頂ひて御目に懸つたことを先生は大へん歡んでおりました。」

老夫人の聲は遂に震ひをさへ帶びて來た。

青年時代に結婚の面倒まで見て貰つた井上要氏は、

「高須君は自分の思ふ儘の事をやつたのだから縱ひ失敗しても殘りはあるまいが、夫人の晩年は誠に御氣の毒の至りぢや。」

と痛く老夫人に對し同情して居た。

人生れて婦人の身となる勿れ、百年苦樂他人に依ると言ふが全く其の通りである。夫れにしても貞淑能く家を守り、翁をして内顧の患と家事の煩とを無からしめた夫人の内助の功は甚だ大であつたであらうと思はれる。

此賢夫人を得た高須翁は人の夫として幸福な人であつたと謂ふべきであらう。

雜聞拾遺

之は高須翁が晩年非常に信頼して居た越智秀一氏の談に依るものである。同氏は高須家の遠戚に當り、青年時代の何年かを高須家の書生として玄關番を勤め、翁に最も深く親炙すると共に翁の家庭に就いて最も精通せる人である。

越智氏が高須家に居たのは大正の初期歐洲戰爭當時で、翁が尙ほ憲政會支部長として政界に活躍し又辯護士會の長老として幅を利かして居た、翁の生活中最も華やかなりし頃であつた。

翁が辯護士界の重鎭として斯界の尊信を博して居たことは言ふ迄もない。併し辯護士と裁判官との間には自ら越へ難き官民の溝があつて、裁判官は動もすると辯護士を輕蔑する風があり、從つて裁判官が辯護士の私邸を訪問することは殆んど絶無とも言ふべきであつた。然るに高須翁の邸ばかりへは屢裁判官が話しに來たことがあつた。之を見ても高須翁が如何に裁判所側の信用を得て居たかゞ判かる。その頃縣下の重大な訴訟事件は高須翁の手を經なければ解決がむつかしいと言はれた程である。

從つて翁の法律事務所は千客萬來の賑はしさであつたが、翁は辯護料を一々勘定して受取つたことはなく、事件依頼者から謝禮金を持參すると、上包だけ取つて其のまゝ鞄の中へ投げ込んで置き、月末になると全收入を折半して、其の一半を共同事務所を開ひて居た富田嘉吉氏へ渡したのである。二人が取扱つた事件の大小多少などには一切拘泥することなく、その點誠に恬淡無私であつた。之は井上要氏と共同の法律事務所を持つて居た時にも同樣であつた。

斯樣に高須翁は自分で金の勘定をすることは殆んど無かつた。銀行などへ金を持つて行く時には、いつも越智氏が札の數へ役であつた。實印などの取扱も極めて放膽で、他人に預けたまゝ二日も三日も抛つて置くといふ風であつた。越智氏などが注意すると、翁は人を信用する以上は一すでも疑ふてはいかんと言つて取合はなかつた。

實際翁は一度人を信じたら、誰が何と言はうと、トコトンまで徹底的に信用する人であつた。實名を擧げることは憚かるが、翁が愛媛新報社長時代に使つた者の中に氏田（假名）と云ふ人があつた。此人は翁の處へ御百度を踏んで就職を歎願したので、翁も遂に其の熱心にほだされ、新

間社へ入れたのであるが、中々仕事が出來るので忽ち翁の信用を得て了つた。

すると間もなく、彼は翁を笠に着て專横な振舞をするので、社員、重役、株主の總排擊を受けたばかりか、翁の家庭に於ても鼻を摘まれたのであるが、翁は何處までも氏田氏を信じて疑はず、遂に彼に殉じて社長を退くに至つたのである。此時に於ける翁の態度は意地づくとさへ思はれた程であつた。

其後も翁の彼に對する信用は少しも衰へぬのみか、寧ろ益々重用して相談相手としたのであるが、松山に於ける翁の聲望を損じたのは、氏田過信の爲めであるとさへ言はれて居る。それ程翁は一旦人を信じたら何處までも疑はぬ人であつた。

香川熊太郎氏なども今では押しも押されもせぬ立派な紳士であるが、氏が始めて實業界に乘り出した時には、松山では殆んど齒する者がなかつたのを、高須翁は「見所がある」と言つて、世間の非難や、友人の忠告を排除して引き立てたのである。香川氏はうまく掘り當てたが、氏田氏は見損つたと晩年氣が付いたらしい。

* * *

高須翁が非常に同情心の强かつたことは、翁の經濟的破滅の一つの原因であつた。併し翁は決して人に金を貸恵んでやる樣なことはせず、必ず證書を取つて居た。それは返濟を求める爲めではなく、人を乞食扱ひにすることを好まなかつた爲めであつた。

高須家に出入する者の中に青木某と呼ぶ非常に酒好きの男があつた。翁から借りては飲み、借りては飲み、誰が何と意見しても忠告しても止めなかつた。それが爲め借用證が一寸もの高さに翁の手元に溜つた。借る方も借る方だが、貸す方も貸す方であつた。

或日翁は布片で袋を作り、其中へ青木の借用證を入れ、袋の上には自分で「忍」の字を書き、青木を呼んで例もの口調でニコ〳〵しながら物靜かに言つた。

「此の袋を御前にやるから、此後酒が飲みたくなつたら此袋を見て、自分の欲を忍ばなけりやいかん。もし其れを忍ぶことが出來ぬ樣なら、お前は生きて居ても此の世の中に役に立たん人間だから死んで仕舞つた方が宜かろう。」

青木は燒火箸で胸を抉ぐられる樣な氣がしたが、それ以來ぷつゝりと酒を止めて眞面目に働く樣になつた。

此話は青木が肌を脱いで居た時、腋の下に妙な袋を下げて居るのを越智氏が見付け、その來歴を聞ふたのに對して青木の告白であつた。

元來翁は他人に對して自分の爲したことを決して吹聽しなかつたので。人の知らない斯樣な陰德は外にも澤山あつたことゝ思ふ。如何なる問題に就いても、翁は其人に關係のない事は一切話をしない流儀であつたから、翁と親戚同樣に親しくした井上要氏でも、翁の事業方面の事に就いては深く知らず、子倆の樣な富田嘉吉氏でも辯護士關係以外の問題に就いては何も知らなかつた樣である。從つて翁の資產狀態の如きも、他人は素より夫人すらも知らなかつた。唯稅務署への所得申告書を書かされた自分だけが知つて居るくらいだらうと越智氏は言つて居る。

* * * *

高須翁は兩親の晩年の子であつただけに、小供の頃から父母の寵愛を一身に集めて居たのであるが、翁も亦兩親に對しては非常に孝行であつた。

初めて憲政會內閣が成立して河野廣中氏が大臣になつた時、裁判所の辯護士控所で或人が高須翁に向ひ、

「河野廣中さんが大臣になつたのだから、高須先生も松山なぞへ歸つて來られずに中央で活動して居られたら、今頃はきつと大臣になつて居られるでせうに惜しいことですなア。何故こんな田舍へ引つ込まれたのですか。」

と尋ねた、翁は之に對し極めて冷然たる態度で、

「左樣、あれから東京へ殘つて勉强して居りましたら、間違ひで大臣位にはなれたかも知れませんが、何分にも年取つた親があつて、私が遠方へ離れることを非常に心配しますので歸つて來たのでした。外國へも一度は行つて見たいと思つたのですが、それも出來ませんでした。併し負け惜みではありませんが、大臣になるよりも親に安心を與へたことが、私としては本望です。」

と語つたことがある。あの冷靜で理知的な翁に、これ程の孝心があるとは、誰も豫想しなかつたので、翁の話を聞いた一同は痛く感動をされたのであつた。

* * * *

自由平等の福澤宗の洗禮を受けた高須翁は如何なる人に對しても決して待遇に差別をしなかつ

た。特殊部落民などに向つても少しの偏見を持たぬのみか、常に多大の同情と好意とを寄せて居た。

次の談は高須翁の爲めには水火も辭せず命も惜まずといふ程に翁の崇拜者であつた井手(某)といふ今治在の部落の人から、越智氏が直接に聞ひた實話である。

「高須翁が嘗て越智郡から衆議院議員に立候補した時、反對派の自由黨に屬した或る特殊部落民の七八名が、翁の遊説を妨害する爲め途中に待伏して、翁の人力車の顚覆を企てたことがある。

そんなことゝは露知らぬ翁は、先引付きの人力車で今治の手前まで差しかゝると、突然路傍から數名の暴漢が現はれて、翁の車を留め、主謀者らしいのが車を引つ繰り返せと命令した。其の頃の選擧は極めて殺伐で、殺傷事件などは珍らしくなかつたのである。

暴漢は手に〳〵ドスか何かを携へて、翁の車の廻はりを取捲いた。

だが高須翁は落付き拂つて彼等に向ひ、

「まア一寸待つて呉れ、私はまだ命が欲しいから、車をひつくり返へすのなら、私が車から下

りた後にして呉れ。」

と言ひながら悠々と車から降りた。

兇器を持つた暴漢の群を前にして、此の大膽不敵の振舞に、流石の暴漢も氣を呑まれて誰も手を出す者がない。

高須翁は

「用事がないなら、私は急ぐから之で失禮する。」

と路端で震へて居る車夫を勵まして再び車に乘つて馳せ出した、後で暴漢共は

「高須てえ奴は青二才の癖に恐ろしくド膽の据つた奴ぢやのゥ。」

と却て翁の人物に敬服したといふことである。此の話をした人も其の時の暴漢の一人であつたが、以來高須黨に轉向したのであつた。

高須翁に關する斯うした逸話は他にも有るであらうけれども、調査の屆かざるを遺憾とする。

高須翁の臨終

（水野廣徳手記）

一

時は昭和九年五月十四日曉の星と共に、我が鄕黨の先覺者高須峰造先生の靈は消へた。

その前日海軍同窓の友人家族等と共に雨の村山に遊び、新緑の春を郊外に探り暮して夕刻歸宅したる私は、留守中一通の電報が來て居ることを知つた。

チチキトクタカスカズオ

とある。

高須先生が「惡るんだ」。

ハッと心臟の鼓動が躍つた。再び電報を讀み直したが間違ひはない。

先日お見舞に行つた時には大分衰弱はして見えたが、氣分は餘程はつきりして居られたので、今頃斯樣な電報に接しやうとは思ひも寄らなかつた。

電報を打たれてから既に四時間以上も經つて居る。「或は最早や」と思ひながら服も更へず、そ

のまゝ直に鶴見の高須家へ急いだ。

停車場では電車を待つ間の待ち遠しさ。

電車の中では車走の遲きもどかしさ。

でも一時間の後には、私は高須家の玄關に立つた。

「水野ですが御容態は――」

と挨拶すると、そこに居た一人が

「私が一雄です。どうぞずつと御通り下さい」

と折柄來客との話を中絶して私に答へた。

一雄君は先生の嫡男である、私はこの時始めて同君と會つたのである、奥から先日見舞に來た時の、顔見知りの老婦人が出て來て、

「よう來て下さいました。さつきから大旦那樣が御待ちかねで御座ひます」

玄關の次の八疊の座敷が先生の病室である、今日は東枕に寢て居られる、來るたびに枕の向きが變つて居るのも、永い間の病臥に飽かれた先生の退屈をまぎらすための心遣であらう。

老夫人を始め、令息夫婦その他近親の人々に枕頭を護られた先生は、目を開いたまゝ無言で靜かに仰向けに寢て居られる、半月ばかり前に御見舞した時にくらべると一層痩せて衰弱して見へる。

顔は蠟の如く青ざめて生色を見ない、腕は痩せ細つて枯れ木の如く、少しも肉のふくらみがない。齒莖がゆるんで話されるたびにグラグラと動いて居た前齒だけはそのまゝである。

額には冷やし手拭が置かれ、唇は絶えず脫脂綿の水で濕されてゐる。視力は全く衰へ、息づかひは苦しさうで、容態甚だ險惡である。

耳の傍に口を寄せて

「先生、水野ですよ。御判りになりますか、早く元氣になつて下さい」

早や半ば冷たくなつた骨と皮ばかりの手を握ると、言葉が通じたと見へて先生は強く私の手を握り返され、無言のまゝ一二度大きく肯かれた。

何とその手の力の强かつたことよ、あの痩せて骨と筋ばかりの手の何處から、この力が出るのであらうかと疑はれた程である。

見れば先生の兩眼には涙が湛へられてゐる。何か物を言ひたい氣に、口の廻りの筋肉をピクピクと動かされて、嬉しいとも、悲しいとも、何とも形容の仕方のない異樣な表情を示された、傍に居られた老夫人が

「餘程うれしいんですよ、涙ぐんで居りますもの」

他の老婦人が

「あなたの見へるのを餘ほど待ちかねられた模樣で、さつき玄關であなたといふ聲が聞へると寢て居られたのが急に起き上らうとなさるのですもの」

一雄君が

「父はいつも貴方の御噂さをして居りましたので、御迷惑とは存じましたが御知らせ申上げた樣な次第で、よく來て下さつて父も定めし滿足しますでせう。ありがたう御座いました」

「折惡しく外出して居りましたので大へん遲くなりました、何うかと思つて心配しながら參つたのですが、間に合つて誠に仕合せでした。よく御知らせ下さいまして有りがたう御座います。御心配の程御察し申上げます。併し今私の手を握り締められた力はなか〳〵御强よかつたですから、あの模樣ならまだ絕望ではありませんよ」

「さつきは餘程危じかつたのですが注射をしましたら大へん元氣づいて參りました。だが何分にも食慾が全然無くて衰弱して居りますから唯時の問題と諦らめて居ります」

枕頭には沈默の何分か〻續いた。憂鬱の氣が室內に滿ちてゐる。額の手拭は間斷なく取換へられ、唇は絕間なく濕めされた。一雄君の看護振りは誠に涙ぐましいばかりであつた。

やがて醫者が來て第何回目かの注射を行つたが、先生は痛さうにひどく顏をしかめられた。神經はまだ感覺を保つてゐるらしい。

注射の利き目か、やがて先生の肉體は非常に力づかれ、形容そのまゝの蚊の樣な脛で掛蒲團を蹴り捲くられたりした。恐らく無意識であらう。

病氣中先生の最も苦るしまれたのは睡眠の不能であつた、之について一雄君は話された。

「催眠劑も隨分用ひたのですが直ぐ利かなくなるので、仕舞には普通の倍量を使用したけれども、それでも眠れないのです、ちよつと眠つたかと思ふと十分もたつとはや目が覺めるのです、之には病人も醫者も餘程困つたらしいです、病氣の間を通じて十時間ぐらゐ眠つたでせうか」

四十日以上も安眠を缺いではいかに鈍感の頭でも痳痺する。ましてあの聰明鋭敏な先生の頭で四十日の間、夜も、晝も、世相を想ひ、世事を考へられたのでは、その疲勞は勿論、憂悶の程も察せられる。兩三日來意識は大分溷濁して來たといふことである。

二

先生は奄々たる氣息の下に頻に叫ばれる、舌はやゝもつれるが聲は强くて高い。

「社會をだました」

「みな鬼……」

の斷片的寸語を何十回となく繰返された。

怒るが如く、恨むが如く、泣くが如く、歎くが如く、悲痛そのものゝ叫聲である。しかしそれは決して狂人の囈言ではない。一雄君が傍から

「判りました、よく判りましたよ」

となだめると一旦沈默されるが、しばらくすると又同じ事を繰返される。時には意味の全く判然せぬ言葉も叫ばれる。口中の粘液を取る爲めに

「アーンをなさい」

と言ふと、素直に口を開かれる。

「もうすみましたよ」

と言ふと閉される。意識は確に働いてゐる。

將にこの世を去らんとする老先生は今何を考へ何を思ふて叫んでをられるのであらう?。

夢にしろ、まぼろしにしろ、最後の今の瞬間までも、尙ほ社會を思はれてゐることが判る。

私は先生の枕側に冥目して、この老先覺者がこの世に殘される最後の一言一句をも聞き洩らすまいと耳を澄した。

先生は苦しさうないきの下に喘ぎ喘ぎながら依然として

「社會をだました」

「みな鬼……」

を繰返し繰返し叫ばれてゐる、誰が社會をだましたのか、みな鬼じやといはれるのか、みな鬼になれといはれるのかゞ判らない。

何れにしても現代世相に對する烈しき憤ほりと、强き呪ひとであることは語氣と語調とによつて想察される。

注射に依つて纔に保つて居るほどの衰へた體から、戸外にまでも洩れる樣な、大聲で叫ばれるのである。

眞に肺腑の底より絞り出すといふのが先生の今の聲であらう、それは肉の聲でなく靈の叫びであるとしか思へない。

苦しさうな呼吸は骨も現はな胸に大きな波を打たせてゐる。併し脈搏はなほ强く確かである。

私は卒直に言ふ、先生の最後は今の世に滿足隨喜せる樂隱居や有閑老人の死際に、しば〳〵形容されるところの

「眠るが如き靜かな大往生」

とかでは決してなかつた。

僞瞞と僞善とにみちたこの穢き社會に對する憤りと、搾取あくことを知らぬ鬼畜の人間に對する怒りとが、心の中に燃え盛つて、死んでも死に切れぬといふ、世を慨き、人を思ふ、先覺者の

尊き最後を思はせるものがあつた。

七十七歲の生涯を通じて氷の如く冷靜に、綿の如く溫和であつた先生の心が、今や死の直前の瞬間において火山の如く爆發し、火を吐き岩を飛ばして居るのであるとしか思へない。

枕頭に侍つた一雄氏夫人は餘りの痛ましさに堪へ兼ねてか、醫者に向つて

「先生——此の良い御父樣を何うか此上永く苦しめないで下さい。」

とワッと聲を擧げて泣き伏された、恐らく多くの人の心には同じ思が潛んで居たであらう。

あまりにも悲痛な場面である。

併し私は心靜かに祈つたのである。

「希くば此の尊敬すべき先生をして再び起たしめよ。」

一雄氏は醫者と共に別室に行かれた。

之ばかりは讓つて貰ひたいと思つた、あの冷徹氷の如く、明澄鏡の如き先生の頭腦からは、最早や具體的な何事も聞くことが出來ぬのかと思ふと、私の心は自ら寂しからざるを得なかつた。

胸と脚とに注射が施されたが、もはや何の痛痒も感じられない、神經はすでに枯れてゐるので

あらう。

しばらく無言の沈靜が續いた。

先生はあの小さいやさしい目を、ぱつちりとあけたまゝ、醫者が懐中電燈で瞳をてらしても最早や何の反應もない。口を少しく開かれて忙しい息をつかれてゐる。やがて突然非常に大きな聲で叫ばれた。

「……〇〇〇〇も何も皆〇〇てしまつて世界を造りなほすんだ」

「やりますよ、やりますよ、御安心なさい、今に一雄が……になつて御父さんが言はれるやうな世界を造りますよ、見てゝ下さい。」

と一雄君が言ふと、先生は二つ三つ大きくうなづかれて

「うれしい〈〈」

と、さも滿足げに

「嬉しい」

を幾度も〈小供のやうに繰返された。

これが先生最後の言葉であつた。

安心の爲めか、藥の利き目か、先生はもはや再び何事もいはれなかつた。

嗚呼先生の最後の叫び、之ぞ先生の思想の結槃であらう。人の將に死なんとするやその言や善し、之を言はんがために先生は永い間苦慮せられたのであらう。

舌のもつれで言葉は稍や明確を缺ひだ、床側に在つた多くの人の中、誰が能くこの言葉を正しく解し得たであらう。

それは私には餘りにも……すべき偉大なる示命であつた。

三

夜は次第にふけた。先生は目を開いたまゝ靜かに寢て居られる。息づかいは早いが脈は確かである。

最後を御見送りしたいと思つたけれども、あまり遲くなつて電車がなくなつても困るし、混雜の中に永居して家族の人達に氣を使はせても氣の毒である。

朝までは覺められないであらうとの醫者の言葉に、心を後に殘しながら、正子前に先生と御別

れして高須家を辭した。町はすでに眠つて街燈だけが淋しい道を照らして居る。

日本一に交通の頻繁な京濱の電車も、乘客は極めてまばらである。ソォフアーにもたれて目をつぶると、老先生に關する樣々な感想が次から次へと浮んで來る。

私が初めて先生の御病氣を知つたのは四月の初めであつた。たび〳〵御見舞ひしたいと思ひながらも、何分にも道が稍々遠いのと、東京と方角違ひとの爲め、つい〳〵御無沙汰勝ちとなり御訪ねしたのはたつた二回であつた。

行くたび毎に先生は非常に悅ばれて、平常の樣な物靜かな態度と言葉で、御病氣の經過や現狀などを話された後は、社會問題や事局問題などについて諄々と說かれた。とても一月や半月の後に死期が近づいて居る病人とは思へぬ程の元氣であつた。そして人懷かし氣にいつ迄も引き留められるのが常であつた。

先生には最近半歲ばかりも御目に懸らなかつたので、初めて御見舞した時にはひどく憔悴されて居るのに驚いたが、氣分は極めてしつかりして居られるので、きつと回復されること、思つて居た。しかし御病氣中あまり長く御話するのも何うかと思ひ、いつも用向にかこつけて一時間ば

かりで御暇をしたのである。

その時の先生の淋しさうな顏を思ひ出すと誠に御氣の毒で、こんな事になる樣なら、あの時もつとゆつくり御相手をすれば宜かつたのにと、殘念な氣がしてならなかつた。

先生は老いて異鄕に移り住まはれた爲め、土地の知己友人とては少なく、かつ思想や環境等の關係上舊き友人達とも自ら疎遠勝ちとなられたので、病の床につかれて後は訪ひ來る人も稀で、定めしお寂しかつたことであらうに、何故もつとしけ〳〵御見舞ひしなかつたのであらうと後悔もした。

去年の秋手作りの貧弱な菊を見ていたゞきたいと、御案內の日取を豫定までして居たのに、何かの都合で御招待出來なかつたことを返す返すも遺憾にも思つた。

先生の經濟的方面の手腕に就いては知らぬけれども、あれほど思慮に富まれ、あれほど明敏な頭を持たれたのであるから、若し東京の中央舞臺で活動されたならば、政治家としては少くとも一黨の領袖として閣臺にも列せられたであらうにと、世俗的には痛く同情されもした。

否や否や高位高官や、富貴榮達やは人間として必ずしも尊いものではなく、又偉いものでもな

い。それは多くは好運と不義との混血兒である。

先生の尊い處、偉い處は、その老年における先覺的思想である。あの強い研究心と深い體驗とによつて得られたところの透視的觀察力と理智的判斷力との細かい篩にかけた先生の思想には、毫末の利己的汚點と俗人的臭味とがなかつた。

富貴浮雲の如く、顯榮流水の如く、王候も、英雄も、富豪も、恐らく晩年における先生の眼中にはなかつたであらう。

先生の壯年時代の言行については殆ど知るところがないけれども、その世俗的盛名は自分等の小學生時代から疾く耳にして居た。松山辯護士會の棟梁として、縣選出の代議士として、縣會議員として、憲政會支部長として愛媛縣における先生の存在はあまりにも強く輝いて居た。

しかしかゝる俗的な名聲は先覺者としての先生の經歴を飾るものではなく、たゞ先覺者たるの段階に過ぎなかつた。夫れにしてもあの樣に澄み切つた、剃刀の樣に鋭い、練絹の樣に細かい、先生の腦組織が羨ましくも思はれた。

先生が住まはれた松山二番町の屋敷は、以前池田謙造といふ私の義理の叔父が住まつて居たので幼少の頃には屢々遊びに行つて、庭の築山に上つたり、池の鯉に餌をやつたりしたのを覺へて居る。そんな關係で高須峰造といふ名前は、私の小學校時代から深く私の頭に印象づけられて居たのである。

先生に初めて御目にかゝつたのは大正十年、自分が筆禍問題で引入つてゐた際、偶四國每日新聞發行運動のために上京された先生が、同行の故近藤鑑氏と共にわざ〳〵青山の陋屋に車をまけられ、慰問を受けた時であつた。

その時私は先生から普通選擧の話を聞かされて、年に似合ぬ恐ろしく思想の進歩した、しかも頭腦の極めて明敏な人であると初對面ながら非常に敬服したのであつた。

その後無產黨候補者小岩井淨君の應援演說のため、東豫方面を先生と一所に旅行して、親しく馨咳に接するの機を得、益々畏敬の念を深めたのであつた。

などゝ先生に對する過去を追憶し、現在を考想しながら、家に歸つたのは午前一時にちかゝつた。

翌朝再び先生を見舞つた、昨夜の模様では到底絶望とは思ひながらも、今朝までも電報の來ないところを見ると、昨晩手を握られた時のあの強い力や、叫ばれたあの強い聲や、など考へ合はし、あの後睡眠からさめられて、頭の安靜と共にあるひは持ち直されるのではあるまいかと、總てを有利に想像した。

だがいよ〳〵高須家の露路をまがると、電光の如く私の眼を射たものは〇〇葬儀會社と書いた大きな箱であつた。門前には二三臺の自轉車が乘りすてゝある。

嗚呼萬事休す——先生逝去の電報と行きちがひになつたのである。

人々の話す聲もヒツソリとして家内はまことに、しめやかである。

先生の病室であつた座敷へ通ると、先生の體は今まさに白木の棺の中に納められんとしてゐる。血の色こそ失はれたが生けるがまゝの溫顏、目は靜かに閉ぢられ、くちびるは輕く綻ばれ、何等の苦悶の跡を見ない。たゞ額に殘る二筋三筋の淺き皺のみが、八十年間世と鬪つた先覺者の戰歷を物語るばかりである。

「あのまゝ睡眠からさめず今朝方遂に靜かに息を引取りました。」

と家族の方は語られた。

先生は政治家としては成功でなかつた。事業家としては寧ろ失敗であつた。政治家たるには餘りに人間が潔白であつた。事業家たるには餘りに人情味が有り過ぎた。失敗は成功の基で、政治家又は事業家としての不成功が、先生の晩年をして先覺者として鍛成せしめた所以である。

今の時代において政治家としての成功は甚だしば〳〵腐敗漢を意味する。

事業家としての成功は多くの場合に於て搾取鬼を意味する。

先生は又經濟家でも、理財家でも無かつたらしい。先生の私經濟に就いては全く知るところがないが、晩年にはあまり物質的に惠まれては居られなかつたことは事實である。

或る日先生は、

「私は貧乏で仕合せです、もし金でもあつたら屹度シンバとしてやられて居るでせう」

と眞面目に戯談を言はれたことがある。

或はさうかとも思はれた。

先生はその永き生涯を通して、何れの時代においても常に先覺者として社會の前頭を歩まれ

た。その行動形態は時代に從つて違つたけれども、その根本思想は時の支配權力に對抗して民衆利福の增進にあつた。

明治時代には自由民權論を提げて、專制藩閥を向ふに廻はし、大に憲政のために奮鬪せられた。

大正時代には普選運動のために、多くの舊き政友と袂を分つて迄も戰はれた、歐洲戰爭後は更に總ての情實を淸算し、六十の老體を以て敢然無產者解放の陣頭に立たれたのである。

かつては自由民權のために共に手を取つて戰つた當年新人の多くが、年と共に硬化して時代思想に取り殘され、頑迷固陋の保守反動と化し、先きの先覺者今の頑固者となれる間に、ひとり先生ばかりは益々老ひて益々新らしく、いつも時代思想の尖端を步まれたのである。

先生に偉とする一つの點は毫も舊想にとらはれざる點である。

我が鄕黨傑士少なからずとは云へ、この點において先生に及ぶ者はたゞの一人もあるまいと信ずる。先生は體こそ頽齡正に七十七歲の老人であるけれども、心は若き二十代の青年の彈力と韌性とを有して居られた。

五

嗚呼私の最も尊敬したる鄕黨の大先覺者高須峰造先生は遂に逝かれたのである。

魂魄天に飛びしか、地に去りしか、將た空に消へしか、肉死せば靈も滅ぶといふのが私の信念である。先生の靈が殘つて社會大衆を守るなどゝは決して思はない。

だが先生としては牢獄の如きこの社會に、無告の大衆を遺して世を去られるに際しては、幾多の怨みもあつたであらう、幾多の殘りもあつたであらう。

煩悶も苦惱もなき安心の大往生などは世捨人の死方である。苟くも先覺者として世を憂ひ衆を思ふ程の人が、憂憤の心なくして死ねるものではあるまい、我が高須先生は意識の亡くなる瞬間までも

「社會」と「民衆」

を思ひ續けられたのである。

祭壇は佛式によつて設けられた、だが佛式だらうと、神式であらうと、キリスト式であらうと、そんな事は先生の宗教觀から言へば形式以外の何ものでもない、現代における如何なる僧侶

も、神官も、牧師も、自己良心に恥づることなくして、先生の遺骸の前に立つて引導を授け得る者が一人として有るであらうか。千卷の讀經も、萬遍の拍手も、先生に取りてはたゞこれ蛙鳴蟬噪に過ぎないであらう。

告別式は翌日鶴見の自邸において行はれた。それは決して近所の子供達を嬉しがらせる程、賑やかなものでも、盛んなものでもなかつた。香煙はむしろ途切れ〳〵に立ち昇つた。

そこにこそ先生の眞の偉大なる價値が潜んで居るのである。

何れの時代、何れの國においても、豫言者は鄕黨に容れられず、先覺者は時代にいれられぬものと相場がきまつて居る、そこに豫言者としての眞の權威と先覺者としての眞の價値があるのである。

昔から時代の大衆に持てた英雄は多いが、時代の民衆から愛された先覺者はない。蓋棺百年評定まるといふのが先覺者の氣持ちである。

時代の英雄某の葬儀の如く、新聞紙が全紙を葬式記事に埋めなくとも、百八十萬の人間が沿道に立並ばなくとも、私は高須先生の死をヨリ深く悼み、ヨリ多く歎くものである。

我が鄕黨には軍人としては大將もある、政治家としては大臣もある、殊に俳人としては子規居士を始め多士誠に濟々である、是等の人々は何れも私の先輩として或は友人として夫れ〳〵の意味に於て尊敬に値する。

そして其の名聲は人口に膾炙し、その事績は當世に喧傳せられて居る。

銅像も立てられるであらう。傳記も書かれるであらう。

だが先覺者としての高須先生を鄕黨は何と見て居るであらう。

先覺者高須先生は知己友人も乏しき異鄕の土地で寂しく逝かれた。だが先生がその老軀を提げて、砂漠に等しき我が思想界の畑の底に深く〳〵蒔附けられた思想の種子は、何時かは芽を出し、根を下して大衆の心を掩ふ巨木ともなるであらう。銅像や記念碑の英雄的形式は先生の好むところではなかつた。たゞ先生の蒔かれた種子ばかりは、後世のために傳へ殘すべきものであると思ふ。

星一つ消えて寂しき荒野かな
來る鳥に匂ひ殘して梅の花

高須先生の死と私

（村瀬新吉）

○

昭和九年五月十四日、此の日は昨日の車軸を流すやうな大雨に引換へ朝からカラリと晴れた五月晴れ、蒼穹には只處々に積雲の片々を見受けるのみだつた。昨日の雨に一日スッカリ家で腐つてゐた私は、ないことに八時過ぎに家を飛出し、九時半頃昭和ビルの事務所に納まつた。爽々しい涼風が上衣を取つた私の肌にワイシャツ越しにまつわりつく。早速電話をかけたのが讀賣新聞に居る友人の田中幸利君のところ、用件は頼まれてゐた學生の就職問題だつた。

「モシ〳〵、田中さん……」

すると、田中君は、おつたまげたやうな調子で、私の聲を奪ひ取つた。

「あ、瀬戸村君（筆者のペンネーム、以後同じ）僕今お電話しようと思つてゐたところだ。」

「何です？」

「あのね……」

それでもまだ私は高須先生の事だとは氣がつかなかつた。

「實は、高須先生ね、今朝ほど亡くなられましたよ。」

私は、自分の耳を疑つた。

「高須先生が？　だつて一昨日水野（廣徳）先生の御話ぢや、まだ〳〵意識はしつかりしたものだつてお話だつたがね。」

「それがね、今朝四時二十分に急にいけなくなつたんだ。お氣の毒なことをしました、僕もお蔭で昨夜から一睡もせずだよ」

田中君の聲も疲勞と悲しみで元氣がなかつた。

私は悲しみと同時に後悔の念がグッと胸に迫つた。私は水野先生から高須先生の御元氣なうちにいろ〳〵お話を伺ひ筆記して置くやう頼まれてゐたのだが、忙しかつたのと、眞逆こんなに早く亡くなられようとは思はなかつたので、それやこれやで有耶無耶になつてゐたのだ。もう一つは、御病氣になられたことは、先生と心易い田中君の奥さんから疾つくに聽いてゐたのだが、これ亦多忙と、自分の病氣と、そして貧乏のために到頭お見舞にもあがらずにしまつた、これは何

としても申譯ないことだつた。私はまだ若い、隨つて死といふことに對して年を老つてゐる人ほどに逼迫さを感じない、それがいけなかつたのだ。高須先生は既に七十七の高齢で、元來あまり御丈夫でないことは承知してゐながら、尙且つ死をそれほど間近く感じなかつたのは、いかにも私の呑氣さ加減を物語るものだが、反面先生を思慕する念が強いだけに、それだけ先生の死を聯想することが怖ろしかつたのだ。

今更いくら愚痴を竝べてみたつて始まらない、先生は既に此の世の人ではないのだ。死といふ事は、人生に對する大きな鐵槌である。悲しさも、煩はしさも、思ひ出も、凡てが無の一字に歸する。そしてそこから又新しい出發點が生れるのだ。

私は今新しい氣持で先生への思ひ出に浸つてゐる。

○

私が先生を知つたそも〳〵の最初はもう十二三年も前の話だ。先生の御宅は松山市二番町の大きな邸宅だつた。女中だけでも七八人は居たらう。地方辯護士界の長老であり、鄕土政界の重鎭として先生の名は既に有名な存在だつた。當時私は、柳原極堂氏が經營してゐた伊豫日日新聞のヘッポコ記者をしてゐたのだが、あれでも半年位は勤めたらう。私が先生に會ひに行つた用件といふのは、故武藤山治氏が實業同志會を組織され、松山支部發會式に來松される前日、高須先生がその支部長だつたので、話を聽きに行つたのだつた。それまでの先生の閲歷に就いては、私は餘り詳しいことは知らない。何でも政憲會の愛媛支部長をつとめられたり、四國每日新聞を創刊されて失敗されたりした後だつたやうに記憶するが、餘りさういふことに興味のなかつた私は、ハッキリしたことは憶えてゐない。私は初めて會つて、高須先生が案外優しい人だつたのに驚いた。記者生活に馴れない私がマゴ〳〵してゐると、いろ〳〵私の身の上を聽いてくれたりした後、先方から武藤さんの話や實業同志會の話を持ちかけてくれた。當時私は二十一二の青年で、それに今でこそ人一倍圖々しい人間になつてゐるが、當時は人一倍のはにかみやで、高須先生の前に出ると、何から質問していゝのか、てんで樣子が分らなかつた。先生は、僕が實業同志會に加入したのは、此の政治團體が政界淨化を目的としてゐることゝ、所謂職業政治家を排して眞の國民自身の聲を傳へんとするところに目標を置いてゐる點に共鳴したゝめだといふやうなことを云はれて、過去の先生の經驗の一端を語られ、如何に職業政治家が墮落してゐるかを力說された

やうに記憶する。

○

實業同志會の發會式は、大街道の新榮座で開かれたが、私が演說筆記に出掛けた時には、既に滿員で、已むなく二階の隅つこで筆記したものだ。その際最後に武藤氏が演壇に現はれると同時に、二階の片隅で誰かが「武藤山治夫人の緋縮緬の腰卷、紡蹟女工の×の涙」と大聲に呶鳴つた。當時、人道主義的にではあつたが社會意識にめざめかけてゐた私は、此の野次に少からず共鳴したことを憶えてゐる。

○

それから暫らくして私は新聞記者としての自分の生活に愛想をつかしたのと、一つは心理的に或る轉換が來て、冬になると猪の出て來るやうな伊豫の山間に一トルストイアンとして土を耕し、文學や哲學や宗教に就いて思索の生活を續け、丸四年間半農半文の中途半端な生活をしてゐたが、到頭體がつづかなくなつたのと、思想的に更に或る轉換が來たので、意を決して上京したのだつた。この再度の思想轉換は、私が農民の逼迫した經濟生活に伍してゐた結果らしかつた。

○

私が水野廣德先生を初めて知つたのもその當時だつた。水野先生に就いて書きたいことは山ほどあるが、これは他日に讓ることにする。

○

何年の總選擧の時であつたか押川方義先生が松山から立候補されたことがあつた。

當時私は松山で、伊豫日日新聞を止し、獨力で「土」といふ小さな文藝雜誌をやつてゐて、キリスト教の研究をしてゐたりなぞした關係上、私は中立の押川方義先生を一二度三番町の城戸屋といふ旅館に訪ねたことがあつた。

それは開票の當日だつたと思ふ。城戸屋の奥座敷では、押川先生を中にして、高須先生や亡くなつた櫻井鷗村氏や森律子さんのお父さんの森肇氏なぞが、心配顏で控へてゐた。開票の結果は押川先生も落ちた、此の間まで松山高等商業學校の校長をしてゐた渡部善次郎氏も落選組の一人だつた。その人達が順々に押川先生を訪問していろ〳〵語り合つてゐた。丁度その時私もその席に連つてゐたので、高須先生のお顏は見たが別段話をしたりしたわけではなかつた。

○

それから時は十年以上も流れた。

その間、高須先生との交渉の有りやう筈がなかつた。田舍で土を耕してゐた頃、私も「百姓の家」といふものを建て、農民教育の眞似事みたやうなことに手をそめてゐたし、一二度「農民自由大學」を開いたりもしてゐたので、新しい思想的動向にはかなり注目してゐた。隨つて時折地方の新聞で、高須先生が、無產黨から立候補した小岩井淨氏のため橘利八郎、水野廣德氏等と方方を演說して廻つてゐられたことを知り、當時既に七十の坂を越されてゐた筈の先生が、無產運動に共鳴されてゐるその事に對して、少からず敬意が拂へたし、同時に自分自身を鞭打つよすがともなつたのだつた。

更に先生は岩橋信二郎氏（元四國每日新聞の編輯長をしてゐた人）の民衆新聞をもいろ〳〵と援助されたやうだつた。それから、又先生は昔互に相扶け合つた井上要氏が社長をしてゐた伊豫鐵王國を向ふに廻して電燈料値下げ運動を牛耳つたりもされたらしい。信念の人高須峰造翁には、一切の私情行掛りは、問題ではなかつたのだ。

その當時の先生は、財政的にかなり窮乏してゐたらしい。一時は五十萬圓(?)位は儲けもされたらしいが、その頃はすつかり事業や運動の爲めにすつて了つて、眞の無產者になつてゐられたらしい。

○

其後先生にお會ひしたのは、昨年（昭和八年）の春頃だつたと思ふ。前に一寸書いたが、今讀賣新聞に居る田中幸利君のお宅で會つたのである。田中君は私より一二年年下、妙なことから親しく交際を願ふやうなことになつたのだが、田中君御夫妻にはいろ〳〵お世話を掛けたのである。賣文生活の悲しさ、いつも經濟的に不如意勝ちな自分の生活に同情してくれ、いろ〳〵と援助を仰いだりしたこともある。その田中君の奧さんと、高須先生の御子息一雄氏の夫人とが幼友達で、ずつと前から高須先生とは交際を續けてゐられたらしく「瀨戸村さんは松山の人なら高須先生御存知ですか」といつたのがキッカケで、知つてますとも、お會ひしたいなあ、是非一度會つて上げて下さい、喜ばれるでせう……そんなことで、どゞ田中君宅の會見とはなつたのである。

田中君の奥さんの話で、初めて高須先生が東京に來て居られ、然も私の住む同じ大森に居られることを知つたのであるが、先生は晩年非常に孤獨を愛され、求めて人と會はうとされなかつたので、殆んど先生の消息は知己友人間にも知られてゐなかつたらしい。

十二三年目で會つた高須先生は非常に老人になつてゐられたが、以前に倍して柔和な風貌になつてゐられた。晩年の先生は時折田中君の宅へ遊びに來るのを樂しみにしてゐられたらしいが、それほど親くしてゐた田中君ですら、先生がそんなに偉い過去を持つた人とは思はなかつたと告白してゐたほどで、自分の閲歴や過去の業績やに就いて一切誰にも語られなかつたらしい。どこまでも高須先生らしい行き方である。田中君に私が先生の昔を話すと、

「さうかなあ！　僕も只の爺さんではないと思つてゐたが、眞逆そんなに偉い人とは思はなかつた。實に物解りのいゝ素晴らしく頭のいゝおやぢだとは思つてゐたんだよ。」

と苦笑した位である。

○

先生は、私のやうな孫にも等しい後輩と話される時でも、決してぞんざいな言葉は遣はれなかつた。「さうぢやなもし」とか「いきませんなもし」とか、懐しい松山辯丸出しで、親切に色々物語つてくれたものであつた。

私は、常々畏敬してゐた高須先生に會へた喜びを、早速水野廣德先生にお傳へした。水野先生も、

「ほう、それや懐しい。是非お會ひしたいから住所を教へてくれ」

と、直情の水野先生はその日のうちにも訪ねまじき氣配だつたので、私は早速田中君に話すと、話は直ぐ高須先生の耳に入り、こちらからお訪ねするといふことになつて、一日（春だつたと思ふ）高須先生を水野先生宅へお供した。

朝の八時頃から夜の十時過ぎまで私と水野先生は、高須翁を中にして、翁に話を訊くの會を開いた。先生は過去を語り、現代を憂へ、將來を豫言して、語れど話せど盡きなかつた。先生の頭の良さと博覽强記には驚嘆の外はなかつた。その席上で、私は二先生に白扇へ寄書して貰つた。高須先生は『自由平等』と書かれた。これが生涯を通じて變らなかつた先生の信念であり、主義であつた。その裏へ水野先生が『百年の後に友待つ反逆兒』と書いてくだすつた。

その時のことである。水野先生が私をつかまへて、「君、高須先生のお話は實に面白かつた。先生の御元氣なうちに先生のお話を筆記しておいてくれ。先生が亡くなられたら、僕は喜んで先生の傳記を書く」と云はれたのに、その約を果さなかつた私は、せめてもの罪滅しに、是が非でも先生の傳記をと思ひ立つて、先生の亡くなられた夜、靈前で一雄氏と語り、翌日水野先生にも御相談申上げたやうな次第だつた。

○

話は前後するが、私は一二度高須先生を大森の假寓にお訪ねしたことがある。何でもロンドン會議の前後だつたと思ふ。先生は實によくその間の事情に就いて知悉され、平價切下問題などにも話が觸れたやうだつた。その當時私は賣文社を兼ねた出版社を初めてゐたので、いろ〳〵費用が嵩み、或る有名な武人の傳記を知人に買つて貰つたりしては、その間の利潤で創業當時の苦難と闘つてゐた。先生にも、御苦しいお手許は知つてゐたが（先生は晩年ずつと御子息一雄氏の家で起居されてゐた）一冊買つて頂きたいと、厚かましく申出た。ところが先生はあの柔和な顔をきつと引締られて、

「元の私なら（先生は謙遜されてであらう、決して僕といふ言葉は使はれなかつた）少々の御援助はして差上げられるのですが、今は息子の厄介になつてゐる身でそれは出來ませんが、此本も自分の尊敬してゐる人の物とでもいふのなら兎も角、此の人は世間では一世の英雄のやうに思はれてゐるかも知れませんが、私に言はせれば、尊敬どころか、寧ろ愚物の最たるものでしたよ。さういふ人の傳記を金を出してまで讀む氣にはなれませんから、失禮ですけれどお斷り致します」

と、實にハツキリ斷られた。

私は少々てれくさかつた。併し流石に高須先生だと思つた。どんな些細なことにも眞理と信念を持つて臨まれる先生の態度には敬服の外はないのである。

高須峰造論

（水野廣德）

（一）

聖人は德を以て天下を化す。翁高須峰造は聖人ではなかつた。

君子は道を以て天下を率ゆ、翁高須峰造は君子でもなかつた。
賢者は教を以て天下を導く。翁高須峰造は賢者でもなかつた。
思想に依て民心を啓くを先覺者と云ひ、實踐を以て世道を拓くを先驅者と云ふ。翁高須峰造は蓋し之に當るものか。

彼は幕末混沌の際、生を北豫の農家に享け、幼にして秀才、稍や長じて青雲の志に燃え、家を脱して笈を大阪に負ふ。慷慨氣を驅つて多く自由民權の士と交はり、漸く壯士の群に入らんとした。

だが幾もなく自ら省みるところあり、更に東京に遊んで慶應義塾に入り、教を福澤諭吉翁に受けた。

人生の行路、西せんか、東せんか、彼の向ふところ略ほ此時に決したのである。

人の下に人を置かず、人の上に人を置かず、自由平等と獨立自尊とは福澤宗のお題目であつた。

人民の自由を奪ひ、國民の平等を破ぶる藩閥官僚の徒ほど、凡そ福澤宗とはソリの合はぬものはなかつた。

三田派の洗禮を受けた當時の青年高須峰造は腰を五斗米に屈して閥族の走狗となるを屑しとせず、獨立自尊の教を奉じて民心開發の爲め、卒業後再び破れ袴の紐を鄉貫に解くことゝなつた。

彼にして初め着京の草鞋を三田に解かず、更に北して神田、本鄉にまで進ましめば、彼の人生行路は著しく異つた方向を辿つたのではあるまいかと思はれる。

彼の聰明と叡知とを以てせば、學界に入れば大學者となり、官界に入れば少くも閣臺に伴食する位は難くはなかつたであらう。更に中央の政界に馳驅すれば尾崎、犬養と轡を連ねたであらう唯事業界に入れば或は倒産落魄、死所を知らなかつたかも知れない。

當年の新知識として錦ならぬ小倉服ぐらいを着て、鄉黨に歸へりたる彼は、新進氣鋭の勢を以て政治家となり、辯護士となり、鳥なき里の蝙蝠然として、たそがれの田舍の空を飛び廻つたのである。

鷄口となるも牛後となる勿れで、田舍と云へどもお山の大將となれば偉ひものである。小成に安んじた譯でもあるまいが、持てるまゝに、金の出來るまゝに、辯護士三十五年の彼の生活は、あまりにも平凡尋常で、宮相撲の大關に過ぎなかつた。

とは云へ人間三十代、四十代は正に人生の花であり、享樂の絶頂である。此の間に於て私生活の歡樂を滿喫したる彼は一代の幸福兒とも言ふべきであらう。

（二）

翁高須の壯年時代に於ける私生活は決して嚴格なるものではなかつた。そこには幾多の戀のローマンスに花が咲き、實を結んだことであらうと思ふ。

此の點に於て彼は人に道德を說く資格はない。

彼の道樂は世間多くの紳士と等しく、花かるたと藝者遊とであつた。世間或は之を以て彼の素行を責める者がある。彼自身としては一語の辯明の餘地は無い。彼の晩年の言動に省みる時、彼は自責自羞、平身低頭して前非を大衆の前に謝するの外はないであらう。

だが、幸か、不幸か、彼は身を以て範を社會と後進とに示す敎育者でも、道學者でもなかつた。從つて社會に對する責任は比較的輕く、情狀酌量の餘地は充分にあるであらう。

それは彼の罪と云ふよりも寧ろ社會習俗の罪である。當時松山の花柳界は辯護士と醫者とで持つて居るとさへ言はれた時代である。

凡そ人間の行爲の善惡を秤るものは道德と法律とである。然るに世の中には、法律で禁じても道德では寬假されて居る罪もある。

道德で禁じても法律で許されて居る罪もある。

花札の如きは法律では罪となるも、道德ではそれほど罪惡と思はれない。法律の守護神と言はれた當年の大審院長兒島惟謙すらも弄花事件では役人を棒に振つたが、代議士には當選した。

藝者遊は道德的には罪惡と言はれて居るけれども、法律では散財女郎買天下御免である。

だから法律と道德と二つながら禁ずる罪を犯す者は惡人であり、之を犯さぬ者は善人である。

だが、法律と道德と、一方が禁じ、一方が許す罪を犯す者は善人でもなく、惡人でもなく、尋常普通の人である。裁判なら免訴か、起訴猶豫となる連中であらう。

昔基督が汝の心に疚しきところなき者は此の姦夫を打てと言つたら、誰も進んで打つ者が無かつたと云ふことだが、己の良心に耻ぢずして翁高須の私生活を責め得る者が、松山の紳士中に果して幾人あるであらう。

（三）

翁高須は又決して無欲ではなかつた。彼は金を儲ける爲めに鑛山にも手を出した。株も少しはやつたらしい。大阪商船株では大分損をしたといふ話も聞いた。

だが彼は決して守錢奴ではなかつた。出すべきところへは能く出した。彼は金を儲けることに興味を感ずると同樣に、金を散ずることにも亦興味を有つて居たらしい。彼が花札を好んだのも之が爲めである。

昔からばくち打と飲んだくれとに守錢奴はない。

つまり彼は物質に對して愛着は有つたが執着はなかつた。卽ち思ひ切りが良かつたのである。諦らめが良かつたのである。言ひ換ゆれば寡欲であつた。恬淡であつた。彼の門戸榮へたる時、彼の親戚知友にして物質的援助を彼に仰いだ者は決して尠くはなかつたといふことである。

由來物質に寡欲なる者は人情に濃厚である。甚だ矛盾なるが如くにして決して矛盾ではない。人情に厚きが故に自ら物質に寡欲となり、物質に寡欲なるが故に自ら人情に厚くなり得るのである。だから物質に寡欲と人情に濃厚とは恰も物の表裏の如く、互に相反しながらも互に相離れることの出來ない人間の性格である。

翁高須も亦此性格の軌範を逸することは出來ず、人情には厚すぎるほど厚かつた。政治的に、或は思想的には相容れぬ如何なる彼の敵も、此の點に於て彼を非難する者はない。併し彼の人情味は決して感傷的同情ではなかつた。もしも夫れが無意義の救濟であると知つた場合には、近親に對する援助さへも斷乎として拒絶した。

翁高須が如何に人情味に厚く、人間味に富んで居たかは、異性に對する彼の態度が之を說明して居る。彼は血氣尙ほ盛んなりし頃、井上要、御手洗忠孝などゝ共に遊び廻り、松山花柳界を風靡したものである。唯彼はあまり酒を嗜まなかつた爲め、醉餘の失態を殘さなかつた。

そして彼は花柳の情界に出入しながらも女に對して決して箒をしなかつたといふことである。此點に於て彼は彼れ自身、井上と彼とを比較して居る。「高須翁の自己批判」は眞に己を僞らざる彼の告白であると思はれる。

井上要と言へば、松山事業界の成功者として、又元老として今は斯界の大御所である。井上の名は本書の中にあまりにも屢々引き出されて居る。

翁高須と井上要とは或時は、一心同體の腹となり、背となり、又或時は同じ舞臺にシテとな

り、ワキとなり、松山の政治界に、社交界に活躍したのである。高須の影に井上あり、井上の後に高須ありで、此の二人は眞に形影相伴ひ、聲欬相應ずるの觀があつた。だから兩者の經歷には相共通せる部分が少くない。

高須の聰明、井上の賢明、共に松山には得難き頭腦である。唯高須が一里の先きを見る間に井上は一丁の先きを見、井上が明日を見る時に高須は明後日を見るの差があつた。是れ井上が時代の寵兒として今日に榮へ、高須が先覺者として明日に輝く所以である。

高須と井上とはそれ程よく提携事に當つたとは云へ、その性格は全く相反して居た。此の性格の相違こそ却て兩者をして、しつくりと凸凹相嵌合し、隆窪相充塡し、以て管鮑の交を結ばしめたのであらう。

高須は女に對しては一人を熱愛したるも、事業に對しては手當り次第の箒であつた。

井上は女に對しては手當り次第の箒であつたが、事業に對しては一事一業に心血を傾注した。之は必ずしも井上が伊豫鐵といふ優良事業を攫み當て、高須が群小ボロ事業を漁り廻つたといふ運不運の問題ばかりでなく、兩者性格の相違が然らしめたのである。假りに高須をして伊豫鐵經營に當らしめたなら彼は恐らく中途で投げ出したに違ひない。

翁高須は愛情の爲めには一人の女を守り得ても、金儲けの爲めには一つの仕事に一心不亂になることの出來ない性格である。

彼は嘗て近親の人に向つて、

「金を貸せといふ人に對しては、無ければ「無い」と言つて斷はることも出來るが、判をついて呉れと頼まれる人に對しては斷はる譯にいかん」

と言つたといふことである。その爲め彼は人の爲めに相當判かづきをしたらしい。

人を苦しめて自ら富むといふことは彼の性格の許さざるところであつた。そして此の性格が彼の運命を支配したのである。

(四)

他人に對して物質慾に恬淡であつた翁高須は彼れ自身に於ても相當浪費者であつたらしい。惡錢身に付かずと云ふが、縱ひ惡錢でないにしても、辯護士と醫者との報酬は、資本と勞力とを要せざる貧乏人泣かしの泡吹く錢である。彼等が花柳界の金櫃となるのも此の爲めであらう。

だが浪費は尙ほ吝嗇に勝つて居る。天下の公貨を獨占死藏して不良息子やあばずれ娘を作るのに比すれば尙ほ可なりである。若し彼等が浪費の代りに搾取を止むれば、彼等も亦一歩賢者に近づくことが出來るであらう。

翁高須晩年の非運は事業失敗の爲めであると言はれて居る。彼の聰明を以てしては誠に不似合と言ふべきである。想ふに彼の人間味と寡欲性とが、頼まるれば他人が手を出さぬボロ事業に迄も資本を投じたる結果ではなからうか。

人間としての寡慾は事業家としての無能を意味するものである。

人を見たら泥棒と思へ、金を見たら盗まうと思へ、之が世の中である。

松山の事業家として高須翁の向ふを張る下手の横好きは岩崎一高であらう。あの狸が禪僧に化けた樣な摑まへどころない岩崎が事業家であると言ふぐらい、見掛けと正體との平仄の合はぬものはあるまい。

彼も亦鑛山から炭燒まで、さま〳〵の事業に首を突き込み、九州の果てから陸奥の山奥まで、多年成金を夢に見ながら飛び廻つて居るが、まだに金藏の建つたことを聞かない。

貧乏登錄濟みの岩崎の事業は人禪の相撲だから、縱ひ轉んでも自分の腹は痛まないといふことである。此點高須の無理算段よりは樂である。だが岩崎が七十の老體を以て、北國雪の山中に坑夫と共に穴の中で自炊生活をやるなどは、道樂としてはチト念が入り過ぎて居る。

自由黨と改進黨とは日本の憲法政治と共に生れ出でたる二大政黨であつて、その流を汲むものが今の政友會と民政黨とである。社會的イデオロギーを有たぬ此等の政黨には、主義や政策の相違は殆ど見ることが出來ない。唯時と所とに從つて朝三暮四の入れ換へをなすばかりである。

だが此等の政黨に集散離合する黨員なるものゝ性格と素質とには、自ら截然たる傳統的の型がある。自由黨の末流たる政友會には理性よりも感情に去就する親分子分式の壯士肌の人物が多く集り、改進黨の後身たる民政黨には感情よりも理性に左右せられるインテリ式の理想家が多い。大雜把に言へば政友會は現實主義で民政黨は理想主義である。尤も兩黨共に我利々々本位なる點に於ては共通である。

政友會の元祖板垣退助が熱情の實際家であつたのに對し、改進黨の親玉大隈重信は大風呂敷の空想家であつた。政友の原敬氏は政治は力なりの權力萬能宗であつたのに對し、憲政の加藤高明

は政治は道德なりの英國式憲政主義であつた。

政友の田中オラガ大將が反動の帝國主義であつたのに對し、民政の濱口ライオン居士は進歩的協調主義であつた。腕の喜三郎に智惠の禮次郎、人は矢張り類を以て集まるものである。素より偶には高橋ダルマ、町田ノントウの樣な型破りの除外例もないではない。

此の兩政黨が我利々々酒に醉つぱらつて八人歩きをして居る間に、いつも道理のある方に乘り換へたのが尾崎咢堂老であり、いつも自分に都合の良さゝうな方にくつ付いたのが床次の竹さんである。

松山の政治界に於ても兩黨間の人間的類別は大體此の型にはまつて居る。自由黨系の長屋忠明、藤野政高、岩崎一高などが理論よりも現實主義の人であり、改進系の小林信近、高須峰造、井上要などは何れも冷靜なる理知的の人である。縣下の政治家中、高山長幸と御手洗忠孝とは互に其の出處を取違へたのでないかと思はれる。

政友會支部長岩崎一高と、憲政會支部長高須峰造との對立こそ、縣下政界に於ける誠に面白き對照であつた。高須が秋の空の樣に澄み切つた頭腦と、明徹氷の樣な理知とで旗色極めて鮮明な

るに對し、岩崎は色彩朦朧、春山の花を見るが如く、ぬらり、くらりと瓢箪鯰の押へどころも、捕まへどころもない。

高須には協調はあつたが、不合理な妥協はなかつた。岩崎に至りては妥協苟合その日の風次第であるが、しかも夫れが少しも不自然に見えぬところに岩崎の非凡味がある。

要するに政治の基調を高須は理想に置き、岩崎は現實に置いた相違である。改進黨系と自由黨系との典型的對照と言ふべきであらう。

岩崎は政權の好運に惠まれて無事に支部長を卒業し、大御所に收まつたが、高須は政權の非運に苦しめられて支部長の椅子から滑り落ちた。

だが高須の政治的、思想的覺醒は此の落第の御蔭である。世は塞翁が馬と謂ふ、濁榮に醉ふか、清節に甘んずるが、翁高須は恐らく後者を擇んだであらう。

(五)

大正の時代、松山に於て政治、社會、事業の三方面に於ける牛耳を取れる者が五人あつた。曰く伊豫鐵道會社社長の井上要、政友會支部長の岩崎一高、松山瓦斯會社社長、海南新聞社社長の

香川熊太郎、愛媛新聞社社長の御手洗忠孝、それに市の長老たる翁高須峰造である。

此うち岩崎、御手洗、香川の三人は相前後して松山市長に選ばれて居る。

此等五人者は其の性格に於て、其の經歷に於て、長短是非の評を異にこそすれ、何れも當年松山に於ける人物中の錚々たるものであつた。他の四人が晩年おの〳〵其の處に安んぜるに反し、獨り翁高須のみがあの明敏さにして轗軻世に遇はなかつたのは何故であらう。

翁高須には

井上ほどのづるさが無かつた。

岩崎ほどのとぼけが無かつた。

香川ほどの押しが無かつた。

御手洗ほどの蠻骨が無かつた。

だが聰明に於ては恐らく高須を以て第一に推すであらう。

翁高須の聰明を思ふ毎にいつも聯想されるのは、山縣有朋と西園寺公望と尾崎咢堂とである。老ひて少しもほれず、頭腦年と共に益々冴へる點に於て四者何れも同じ腦組織の所有者である。

たゞ山縣は閥族の頭目として又軍人の旗頭として思想固陋に陷り、西園寺は華冑の出として又最後の元老として深く鋒鋩を收めて了つた。寧ろ一平民高須の思想家として又先覺者として活躍したるの優れるに如かずである。獨り咢堂が反動の嵐吹き荒む中に、社會正義の孤壘を守つて、强努の末勢に悲壯の矢を番へて居る。

翁高須の亡き今日、遺憾とするは翁と咢堂とを會見せしめなかつたことである。

翁高須は人間として餘りにも生眞面目であつた。場合に依つては餘りにも馬鹿正直であつた。彼は善と認め、正と信じたところは、自己良心の軌道のまゝに一直線に邁進した。途中の凹凸起伏の如きは意とするところではなかつた。だから坂に乘り上げ、谷に陷るり、遂に轉覆したのである。

彼は眞つ直ぐに立たんとして倒れた屏風である。

社會が平坦であつたなら、彼は第一番に決勝のゴールに入ることが出來たであらう。

世間の多くの人間が社會の起伏を意識せず、凹凸を感覺せず、何の生活理想もなく、何の到達目標もなく、唯足の向くまゝに高きに上り、低きに下り、地の形に從ふて西に東にさまよへる間

に、翁高須には進まんとする理想があり、向はんとする目標があつたのである。

彼は此の理想と目標とに達せんとして眞つ直ぐに進みたるが爲め、社會の凹凸と起伏とを發見した。そこに先覺者としての彼の偉さがある。そして此の凹凸を平坦に爲すべく努力したところに先驅者としての彼の尊さがある。

當年松山知名の士にして晩年世に遇はざりし人に、翁高須の外に極堂柳原正之がある。極堂は嘗て岩崎一高、大政章津等と共に政友會の御大藤野政高の股肱として縣下の政界に飛躍し、岩崎がまだ政界のルンペンとして羽織でゴロ〳〵して居る間に、彼は藤野の信任を得て幹部の要職に在つたといふことである。

極堂が如何なる動機と發心とに依り政界の泥足を洗つて伊豫日々新聞を創刊したかに就いては、嘗て聞ひたことがある樣に思ふけれども、今は忘れて了つた。まさか、借金で苦しまんが爲めでなかつたことだけは明らかである。

極堂の性格より推せば、多分翁高須が既成政黨に砂を掛けたのと同じ氣持であつたらうと思はれる。唯伊豫日にはイデオロギーが無かつた爲め、高須の四國毎日よりは長持がした。

世に苦心慘憺といふ言葉がある。凡そ極堂の伊豫日經營ぶりぐらい此の言葉にしつくり當嵌まるものはないであらう。彼の半生は此の新聞の爲めに借金することゝ、その借金を逃げることゝに浪費したと言つても、恐らく抗議は受けぬであらう。

之が爲めあの高潔な性格の極堂も、松山では一時鼻を摘まれたものである。

此の世の中に於て泥棒よりも、ちぼよりも嫌はれる者は、金を借りて返へさぬ男である。百の美質も、千の善行も、唯此の一事に依つて帳消にされて了ふ。程度の差こそあれ、翁高須も、極堂も此點に於て松山の紳士仲間に可なり不評嘖々たるものがあつた。

だが高須は借りた方よりも貸し放しの方が遙に多かつたであらう。

極堂は晩年を句界に甦生し、子規研究に浚頭して居る樣だが、翁高須は死の寸前までも社會を叫び續けつゝ先覺者らしい終りを遂げた。

(六)

文は人なりと言ひ、字は人格を現はすとも言ふ。

果して然りとせば翁高須の字は何を物語るものであらう。

凡そ一度でも翁の手紙を受取つた人は、必ずその冒頭の冠詞から最後の結語に至るまで一字一語を忽にせず、終始一様、首尾一律、恰も高須式活字を竝べた如き几帳面さに驚いたであらう。

事實に於て翁高須の日常生活は其の手紙の如く、几帳面そのものであつた。

髪は何時もキレイに分けて居た。髯は何時もキレイに剃つて居た。着物は何時もキチンと着て居た。据はれば何時もキチンと正坐した。翁の日常には地墮落といふものを見ることが出來なかつた。

人間の逸話は常に脱線とづぼらの産物である。だから眞面目で几帳面であつた翁高須には面白い逸話と稱すべきものがない。

翁は晩年大分借金に苦しんだらしい。併し返濟の期日が來れば必ず返へした。萬一返へせぬ場合でも利子だけは入れた。萬々一利子も拂へぬ時には書き換へをした。手形なども未だ曾て一日も遲らしたことがなかつた。斯んな几帳面な金の借り手はないと、其の道の人は言つて居たといふことである。

借りた金は必ず返へす、貸した金はなか〳〵返へして呉れない。几帳面な人間はいつも之で損をするのである。

翁高須は瘠身痩軀、白皙無髯、一見田舍役者の様な風貌の持主であつた。その言葉も亦變性男子かと思はれるほどに優しく和やかで、演壇に立つても決して大聲疾呼することなく、諄々として理を說くといふ風であつた。

恐らく何人も彼の忿相と怒聲とを見聞した者はないであらう。

要するに翁高須の外面的接感は婦人の如く軟らかであつた。

人間味豐かに人情美に富んだ彼は屢々人の爲めに己を忘れることすらあつた。彼が部下や子分の爲めに誤まられたことは珍らしくない。

だから人は往々彼を熱情家だと言つた。

然り彼は半面に於て慥に涙の人であつた。併しそれは美しき人情の涙であつて、弱き感傷の涙ではなかつた。

だが他の半面に於て彼は冷靜なる理知の人であつた。所信に邁進するところ、情實に絡む親友も親戚も彼の眼中にはなかつた。

だから人は屢々彼を冷酷漢だと誤り評した。

理性の發達した彼は決して他人に無理を强るなかつた。その代はり道理の爲めには斷じて人に屈しなかつた。

彼は信念の命ずるところ大義親を亡ぼすの勇斷もあつた。泣ひて馬稷を斬るの果決もあつた。電燈料値下問題では四十年來の親友井上要が社長たる伊豫鐵道電氣會社を猛擊することに躊躇しなかつた。無產黨應援演說に出掛けては、夫人の鄕里へ乘り込んで地主攻擊に熱辯を振ふことを辭さなかつた。

信念なき者の容易に眞似し得るところではない。

此の强き信念こそ彼をして偉大ならしめた所以であると同時に、彼の晩年をして寒からしめた所以でもある。

彼と井上要とは幾んど管鮑の交りがあつた。彼と香川熊太郎とは恰も師弟の誼があつた。彼と橘利八郎とは斷金の盟があつた。然かも晩年に於ては三者悉く彼の行動に對し多少慊焉の情があつた樣である。殊に一徹俠氣の橘の如きは、猛然高須排擊の旗をさへ翻へした程である。

此ところ翁高須甚だ不人氣であつた。

だが人は決して神ではない。缺點もあれば弱點もある。聖人と言はれる舜でさへも父親瞽叟の受けは頗る良くなかつた。

此點に於て舜は不孝の子であつたかも知れない。

凡そ人間の行爲は、其の立場と見地とに依つて是非善惡の標準を異にする。ソヴエート露國の忠良なる人民も日本帝國に於ては極惡の亂臣賊子と言はれる。

多くの場合に於て大乘の善は小乘の不善となり、小乘の德は大乘の不德となる。大なる人類愛は小なる民族愛と屢々相容れず、大なる國際正義は小なる國家正義と往々相容れない。翁高須に對する反感の因由が何であらうとも、それが果して社會民衆を思ふ大乘的のものであつたか、將た自己の私利を圖る小乘的のものであつたかを、平靜に考慮することが必要である。

物欲に恬淡で人情に厚かつた翁高須が私利我欲の爲めに、友に背き、友を傷つけたなどとは常識上考へられない。

世には小の蟲を殺して大の蟲を生かすといふことがある。法律の論據は此處に依存する。だが

反對に大の物を削つて小の物を補ふといふこともある。社會共存の思想が此處に發足する。翁高須は其の何れかに依つたものであらう。

斯くの如く翁高須は熱烈の感情と冷靜の理知とを併せ有する二重の性格者であつた。この冷知を以て熱情を包める彼の心は、恰も氷を以て火を包める地球の如きものであつたであらう。しかも彼は決して地球の樣に到る處に火山を爆發したり、のべつに地震を起したりはしなかつた。

彼は嘗て福澤諭吉から「鐵の棒を眞綿で包んだ樣な人間になれ」と敎へられたといふことである。晩年の彼は略ぼ之に近きものを得た樣である。

彼は何に依つて之を得たであらう？　それは天稟に依る聰明の理知と晩年に於ける不遇の苦驗とである。

貧にして初めて孝を見るとかで、我等は翁高須の晩年の不遇を悲しまない。

燃ゆる火を氷てつゝむ君か胸　溶くるひまなく消ゆる閑なし

狂と呼ひ賊と呼ふとも世のまゝよ　まことを知るは百年の後

本書刊行顚末書　附　收支決算報告

昭和九年五月十四日曉高須峰造翁、横濱市鶴見町の寓居に逝かれましたので同年六月八日翁の令嗣高須一雄氏、村瀨新吉氏及私の三人が私の家に會合し、故峰造翁傳記編纂の事に就き相談しましたところ、高須家に於ては編纂の意思なく、私達に於て編纂するも異存なしとの確答を得ました。

そこで同年七月初旬私は家事用向を以て松山へ歸鄕したのを好機とし、高須翁傳記編纂の事に就いて松山地方人士の意向を尋ねたるに、可否の意見區々にして歸一せざるも、さりとて積極的に反對する人もなく、又松山に於て其の計畫あることも聞かなかつたので、歸京の上ゆる〳〵考慮することゝし、松山を引揚げて歸京したのであります。

此時村瀨新吉氏も私の後を追ふて松山に歸り、折柄の酷熱を冒かして故高須翁の知人を歷訪し、傳記資料の蒐集に努めたのであります。村瀨氏の歸京後、私は同君から次の樣な報告を受けました。

一、高須翁傳記編纂資料は相當澤山蒐め得たること。

一、傳記原稿は十一月一杯に自分の手に於て脱稿する豫定なること。

一、資料蒐集の費用として松山に於て若干の金員を收受したること。

斯かる上は最早や考慮の必要も餘地もありませんので、直に事業に着することに決定し、爰に高須峰造翁傳記刊行會を組織して潛越ながら私自ら其の主幹となつて刊行方法を左の如く定め、賛助員依頼書を故翁の知人と思はれる約百七十人に發送し、諾否の回答を求めたのであります。時に昭和九年九月でありました。

拝啓、秋冷の候に候處益々御清祥之段大慶至極奉存候。陳者故高須峰造翁は郷黨の先輩として頭腦明晰、意思堅剛、思慮に富み人間味豐かにして、多年政界並に法曹界に活躍せられ、晩年又思想家として大に社會啓蒙に努力せられ、其人物性行誠に景慕欽仰に堪へざるもの有之、其の逝去は實に痛惜の極みと存候。就ては翁の知遇を辱しめたる不肖等此たび菲才微力を顧みず、翁の風格を後世に傳へんが爲め其の傳記編纂を志し、曩に之が資料蒐集に力め候處、幸に各方面の厚き御同情と御援助とに依り、資料も略ぼ相整ひ候につき、茲に高須峰造翁傳記刊行會を組織し、愈々編纂に着手する事と相成候。故翁生前に於ける貴下の御交誼を偲び、本會賛助員として趣意書に御芳名を掲ぐるの榮を得たきと共に、事業完成の爲め御援助と御指導を仰ぎ度く、何卒御承引の程を奉悃願候。尚ほ趣意書調整上の都合も有之候へば、甚だ勝手には候へ共御諾否の如何に拘らず折返へし御一報煩はし度願上候。

昭和九年九月　日

敬具

高須峰造翁傳記刊行會

主幹　水野廣德

殿

追伸

高須翁傳記は大要左記方針に依り刊行の豫定に御座候

一、會員組織に依る豫約刊行

一、會費壹口金貳圓とし壹口につき傳記一部を贈る

但し四六判約五〇〇頁の豫定

一、豫約の數は最少限五〇〇の豫想

一、昭和十年一月配本の豫定

右に對し、賛助員たることを承諾されたるもの四十八名、拒否されたるもの六名、其の他は諾否の回答に接しませんでした。

同年九月左記趣意書約壹千通を各方面に發送しましたが、反響極めて微弱にして會員申込は意外に少く、十二月末日迄の申込は人數に於て僅に四十六人、金額に於て約三百八十圓（村瀬氏直接受領の約百四十圓を含む）に過ぎなかつたのであります。

高須峯造翁傳記刊行趣意書

先般物故されました高須峰造翁は鄉黨の大先輩として稀に見る明晰な頭腦の所有者であり、同時に意志堅剛にして信念に強く、又人間味豐かにして情誼に厚く、多年政界並に法曹界に活躍せられ、晩年又思想家として社會啓蒙に努力せられ、その人物性行誠に景慕欽仰に堪へざるものがありました。

高須翁は愛媛縣越智郡近見村大字大新田の出生で、明治拾三年慶應義塾を卒業されて以來終始縣鄉に在つて地方文化の啓發と地方自治の爲めに粉骨碎身されたことは、諸賢におかれても夙に御承知のことゝ存じます。その間縣會議員に選ばるゝこと數回、明治二十五年には早くも衆議員議員に當選され中央の政界に活躍されたのであります。

これよりさき明治十五年松山市に轉住されてからは辯護士として法律事務に從事される傍、明治二十一年同志と相謀り愛媛新報社を創立してその初代社長となり、大正七年まで引續き就任され、尙ほこの間憲政會愛媛支部長、松山瓦斯會社及愛媛鐵道會社々長、郡中銀行頭取、伊豫米穀取引所理事長、久万索道會社々長等に任し、鄉黨實業界にも大なる足跡を印せられたのであります。其後四國每日新聞社を興して其の社長となり、又實業同志會愛媛支部長に任ずる等、愛媛縣下に於ける政治、經濟、思想界に斷然重きをなし、名實共に『伊豫開發の父』として地方人士から敬慕の的となつて居られました。

大正七年還曆を迎へられると同時に途を後進に開かんが爲め公私一切の職より退かれ、以後

は一自由人として專ら社會問題の研究に沒頭し、晩年は社會思想家として大に大衆の啓蒙に努力されました。

晩年の翁は令息一雄氏の東京の邸に起居されてゐましたが、病床に臥せられてから後も、絶へず意を社會と國家との上に用ゐられ、臨終の際にも家庭上の事に就いては何一つ遺言がなかつたそうであります、翁の如きは實に典型的な先覺者とも言ふべきでありませう。偶今年は翁の喜壽と翁御夫妻の金婚式とに當つてゐたのでありますが、計らずもその祝賀の代りに哀弔の嘆を見るに至つたことは、翁の爲めには誠にお氣の毒の至りであり、私共に取りては遺憾の極みであります。

私共は茲に自己の菲才微力を顧みず翁の風格を永く偲ぶと共に之を後世に傳へんがため、各方面諸賢の贊助を得て左記の方法に依り翁の傳記を刊行し、些か翁の生前の知遇に酬ひんと志した次第であります。何卒本會の趣旨に御贊同の上鄕黨先覺者に對する頌慕の意味を以て豫約御加入下されん事を切に御願ひ申上げます。

尙ほ御知己の方々へも御勸誘の程を御願ひ致します。

昭和九年十月　日

高須峰造翁傳記刊行會

主幹　水野廣德

贊助員（いろは順）

伊澤多喜男　岩崎一高　井上要　石原操
井上久吉　生島賢二　飯忠太郎　原惠海
新野伊三郎　富田嘉吉　德本良一　大本貞太郎
大石大　大野悌　大野助直　越智秀一
香川熊太郎　柿本泰助　田村安八郎　竹田文平
高須安一　高須直一　玉井晉次　高橋秀一
高須德次　筒井覺太郎　仲田傳之郎　村上紋四郎
村瀨正敬　向井久市　村松恒一郎　柳原正之
山本義晴　安井雅一　山中義貞　柳原正春

松岡貞一　松田喜三郎　小岩井淨　近藤龜吉
安達謙藏　安部秀太郎　安藤晉三郎　水田貞四郎
清水勇三郎　篠崎傳　仙波保太郎　菅井昇平

然るに同年十二月、執筆を擔當したる村瀨氏は新に他に就職したるが爲め、傳記の一半を稿したるのみで執筆の繼續不可能となり、編纂事業の全部を擧げて私に課せられることゝなつたのであります。

だが資料案外貧少で、殊に故翁後半世に關するもの少く、執筆は頗る困難を感じました。

かくて當初配本豫定の昭和十年一月に至るも、原稿も未だ完成せず、會費の集まりも亦甚だ少なかつたので、同月中旬既申込者竝に贊助員に對し、左の書面を出して諒解と援助とを求めたのであります。

拜啓　春寒嚴しく候處益々御清適奉賀候

陳者豫而御後援を忝ふし候故高須峰造翁傳記は本月御配本致べき豫定に有之候處、目下原稿約三分の二を脫稿致し居り候得共何分にも資料不備の上編纂者事故の爲め、小生唯一人にて萬事一切を扱ひ居り候事とて進捗兎角意に任せず、從つて配本期日も御約束より多少遲延致す事と存候條此儀悪しからず御諒恕を仰き度候。又資金の儀は縣下旱害の影響の爲めか今尙豫期の三分の一にも達せず。此のまゝにては故翁の德を傷つくること尠からずと恐懼罷在る次第に御座候。就ては此際御加入金の增額若くは新規御加入を得ば至大の仕合と存じ重ねて御願ひ申上候

尙ほ最少豫定數五百部の出版費に赤字を生じ候場合には已むを得ず配本の殘部を適當の價格にて販買致すことも可有之、此の儀も亦豫め御諒諾を得置き度と存候。此度親しく傳記編纂の衝に當り故翁の人物の益々偉大なるを知り更に一層の尊敬を覺へ申候。何れにしても萬難を排して成就致す覺悟に有之候間此上とも御後援の程願ひ上候

先は右御諒承を願ひ度得貴意候

昭和十年一月十日　敬具

之が反應として矢野丑乙、三好昇平、藤田秀雄、曾根松太郎氏より各一口づゝの追加申込を受け、殊に曾根氏よりは懇篤なる慰藉の書面までも寄せられました。その金額は甚だ零碎なものであつたとは云へ、諸氏の好意は尠からず私を感動せしめたのであります。

尋で二月下旬に至り多大の苦心と努力とに依りて漸く全篇の脱稿を見ましたけれども、資金乏しくして梓に上すことが出來ず、刊行事業の前途は全く暗憺となりました。是に於て私は印刷資金調達の爲め、最後の策として親ら原稿を携へ松山に走つたのであります。滯在數日、東奔西走晝夜を兼ね、叩頭百遍同情を求めたが、口無調法な私に取つては最も不適當なる又最も不愉快なる仕事でありました。

併し幸に案ずるよりも生むが易く、井上要、仲田傳之臥、香川熊太郎、石原操氏など、故翁舊知の多大なる援助に依り、漸く資金を調達することを得て上梓の運びに至つたのであります。是れ一に故翁の遺德と謂ふの外はありません。

同年三月下旬更に最後の手續として贊助員中未加入の人々に對し、左の書面を出すと共に愈々印刷に着手することゝなつたのであります。

拜啓　益々御清祥奉慶賀候

陳者豫て贊助員たることの御承諾を得たる故高須峰造翁傳記刊行の儀編纂甚だ遲延致し居候處此の程漸く脱稿致し愈々印刷に着手することゝ相成候に就ては此際會員として一口なりとも御加入下さるを得ば一は翁の德を頌する意味とも相成る事かと存候幸に御加入下され候はゞ出版上の都合も有之候に付四月十日を以て最後の締切と相定め候條御手數ながら何卒夫れ迄に御送金を仰ぎ度贊助員たらるゝ御關係上厚ましくは候へ共重ねて御願申上候　敬具

昭和十年三月二十七日

右屢次の勸進に依り會員加入を申込まれたる芳名竝に金額左の通りであります。（敬稱略）

金一五〇圓	井上要	金一五圓	竹田文平	金一〇〇圓	仲田傳之臥
金一〇〇圓	香川熊太郎	金一〇圓	大野悌	金六〇圓	石原操
金一〇〇圓	富田嘉吉	金二〇圓	新野伊三郎	金一〇圓	越智秀市
金一〇圓	松岡貞市	金二〇圓	山中義貞	金一〇圓	玉井音次
金二〇圓	橋本徹馬	金一〇圓	船田一雄	金二〇圓	山本義晴
金一〇圓	船田操				

金一〇圓　高山長幸
金一〇圓　阿部秀太郎
金一〇圓　飯忠太郎
金一〇圓　八木龜三郎
金一〇圓　德本良一
金一〇圓　近藤龜吉
金六圓　五百木良三
金五圓　八木春樹
金五圓　八木常一郎
金五圓　村瀨正敬
金五圓　曾根松太郎
金四圓　三木善太郎
金四圓　高橋秀一
金四圓　矢野丑乙
金四圓　三好昇平
金四圓　藤田秀雄
金三圓　生島賢二
金二圓　安井雅一
金二圓　大宰孫九
金二圓　高須直一
金二圓　大野邦道
金二圓　村上正
金二圓　玉井小次郎
金二圓　大野傳吉
金二圓　曾我部右吉
金二圓　村上半太郎
金二圓　山本信博
金二圓　藤野正年

金二圓　菅菊太郎
金二圓　山村豐次郎
金二圓　重松清行
金二圓　吉川祐輝
金二圓　近藤貞次郎
金二圓　高橋精一郎
金二圓　三宅川百大郎
金二圓　佐伯叔作
金二圓　松田喜三郎
金二圓　大西竹二郎
金二圓　皆川治廣
金二圓　高須安一
金二圓　山本信隆
金二圓　見山正賀
金二圓　伊澤多喜男
金二圓　渡部薫
金二圓　越智楳太郎
金二圓　山崎福馬
金二圓　澤田音次郎
金二圓　窪田隆次郎
金二圓　山崎安太郎
金二圓　丸山通一
金二圓　服部嘉香
金二圓　守口武次
金二圓　來住輝雄
金二圓　田村安八郎
金二圓　向井久市

收支決算報告

収入　七百六拾壹圓四拾錢也（内壹圓四拾錢貯金利子）

支出　七百六拾壹圓四拾錢也

内

一、資料蒐集ノ爲メ村瀬新吉旅費及手當（但村瀬直接集金）……一六〇・〇〇圓

一、編纂雜費（印刷、通信、交通費筆墨紙代等）……九九・四〇

一、會員追募並ニ資料補集ノ爲メ水野廣德旅費……五〇・〇〇

一、編纂事務人件費……水野、村瀬勞力提供

一、編纂執筆料……水野、村瀬勞力提供

一、校正料……一二・〇〇

一、書物出版費（印刷製本共）參百部代（一部一圓四二錢）……四二五・〇〇

一、送本料（豫算）……一五・〇〇

差引零

爰に本書刊行に到るまでの顚末並に收支決算を報告し、配本を終はると共に本刊行會を解散することに致しました。就きましては主幹としての責任を解除されんことを望みます。此の機に臨み會員各位並に贊助員の御援助と御厚意とに對して深甚の謝意を表し、併せて萬事不行屆であつたことを御詫び致します。

尙ほ最後に、本書出版に際し凸版印刷會社が出版の趣旨を諒とし、多大の便宜と厚意とを寄せられたることを報告するの義務を感じます。

高須峰造翁傳記刊行會

主幹　水野廣德

人の世や言ひたき事は數あれど

言はぬが花の春の夜の月

昭和十年五月十七日印刷
昭和十年五月廿一日發行

古稀新人 高須峰造先生奥付

非賣品

高須峰造翁傳記刊行會代表者
水野廣德

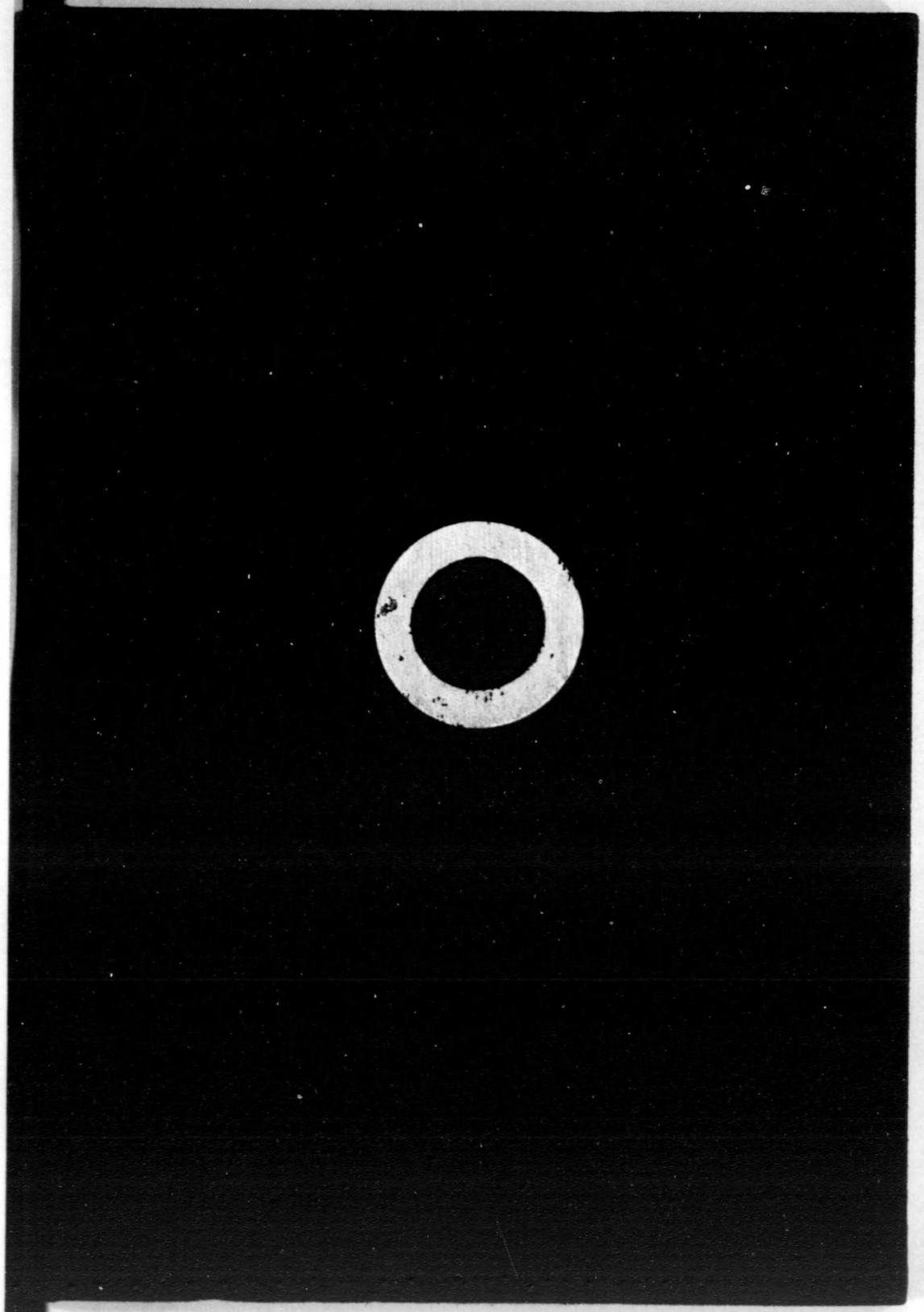
東京市本所區厩橋一ノ二七
守岡功

東京市本所區厩橋一ノ二七
凸版印刷株式會社本所分工場

印刷所
印刷者
著作者

不許複製

發行所
東京市世田谷區三軒茶屋町百四十三番地
高須峰造翁傳記刊行會

禁
140

終